

『朱子語類』訓門人訳注（三）

—— 卷一一六・29条～58条（最終条） ——

『朱子語類』訓門人研究会

本稿は、二〇〇七年秋に発足した『朱子語類』訓門人研究会の二〇〇九年の成果である。本研究会は、『朱子語類』訓門人（卷一一三～卷一二二）の全訳を目指して、隔週で活動が続けている。（会の発足の経緯に関しては本誌第一六号参照。）

本稿の作成は、参加者が順番に訳注原稿を作成し、それを共同で検討した後修正を加え、さらに最終的に訳文の統一をはかるために垣内が加筆・修正をした。訳注原稿の担当者は、各箇所最後にその氏名を記した。

（垣内 景子）

研究会の参加者は以下の通りである。

清水則夫（早稲田大学講師）・宮下和大（早稲田大学助手）・阿部光麿（早稲田大学講師）・大場一央（早稲田大学講師）・松野敏之（早稲田大学講師）・中嶋諒（早稲田大学大学院博士後期課程）・小池直（早

稲田大学大学院博士後期課程)・阿部亘(早稲田大学大学院博士後期課程)・原信太郎アレシヤンドレ(早稲田大学大学院博士後期課程)・田村有見恵(早稲田大学大学院博士後期課程)・梶田祥嗣(早稲田大学大学院博士後期課程)・佐々木仁美(早稲田大学大学院修士課程)・江波戸互(早稲田大学大学院修士課程)・許家晟(早稲田大学大学院修士課程)

凡例

※ 底本は、中華書局・理学叢書『朱子語類』を用いたが、標点等は適宜改めた部分もある。

※〔校注〕は以下の四本を参照し、各略称を用いた。

- ・『朝鮮古写 徽州本朱子語類』(中文出版社) ；楠本本
- ・『朝鮮整版 朱子語類』(中文出版社) ；朝鮮整版
- ・『朱子語類』(正中書局) ；正中書局本
- ・『朱子語類大全』(和刻本・中文出版社) ；和刻本

なお、次の字の異同については、一々注記しなかった。

「著」⇔「着」 「箇」⇔「个」 「辨」⇔「辯」 「它」⇔「他」 「于」⇔「於」
「邊」⇔「辺」⇔「辺」

また、以上の四本において底本とは異なる巻に収録されている場合、巻数と共にページ数を明示した。

※原文・訳文中の「」は小字注部分である。

※〔注〕で用いた略称は以下の通り。

・『語類』：『朱子語類』 なお、〔注〕における『語類』からの引用は、巻数と条数のみを記した（括弧内の頁数は底本のもの）。

・『遺書』：『河南程氏遺書』（中華書局・理学叢書『二程集』）

・『門人』：『朱子門人』（陳榮捷、台湾学生書局）

・『資料索引』：『宋人伝記資料索引』（中華書局）

・『学案』：『宋元学案』（中華書局）

・『考文解義』：『朱子語類考文解義』（李宜哲、民族文化文庫）

卷一一六 朱子十三 訓門人四

〔^{〔校〕}一一六・29〕

問「而今看道理不出、只是心不虛靜否。」曰「也是不曾去看。會看底、就看處自虛靜、這箇互相發。」〔以下訓變孫。〕

〔校注〕

(校1) 楠本本は、本条を卷一一七(二六一五頁)に収める。

〔訳〕

夔孫「いま読書をして道理を理解することができないのは、心が虚静でないからでしょうか。」

朱子「それもやはりちゃんと読もうとしていないからだ。ちゃんと読めたならば、読めたところに応じて自然と心は虚静になっているもの、これ(読書によつて道理を理解することと心を虚静にすること)は互いに促し合うものなのだ。」

〔本条以下、林夔孫への

訓戒。〕

〔注〕

(1) 夔孫 林夔孫、字子武、福州古田の人。『門人』一五八頁。『資料索引』一四〇五頁。『学案補遺』卷六九。

(29条担当 宮下 和大)

〔一六・三〇〕

先生謂夔孫云「公既久在此、可將一件文字與衆人共理會、立箇程限、使敏者不得而先、鈍者不得而後。且如這一件事、或是甲思量不得、乙或思量得、這便是朋友切磋之義。」夔孫請所看底文字。曰「且將西銘看。」

及看畢、變孫（校3）依先生解説過。先生曰「而今解得分曉了、便易看、當初直是難說（校4）。」

〔校注〕

（校1）楠本本は、本条を卷一一七（一六一五頁）に収める。

（校2）楠本本は、「看」を「者」に作る。

（校3）楠本本は、「依」を「所」に作る。

（校4）楠本本は、「難說」を「難曉」に作る。

〔訳〕

先生が（林）變孫（わたし）におつしやった。

朱子「君は久しくここに在るのだから、何か一つの文章を選んで他の人達と一緒に研究し、進度を定めて、明敏なだけが先に進むことなく、愚鈍な人も遅れることないように学んでいけばよいだろう。たとえば、ある一事について甲は理解できなくても、乙は理解できたりするものだ。これが朋友同士で切磋琢磨する（わたし）との意義なのだ。」

變孫（わたし）は読むべき文章をお尋ねした。

朱子「まずは『西銘』を読みなさい。」

読み終わると、變孫（わたし）は先生の解釈にしたがって『西銘』を一通り説明してみせた。

朱子「はつきりと解釈してしまえば、読みやすくなるが、最初は説明しがたいものだ。」

〔注〕

(1) 程限 進度の計画、日程。卷一〇・93条(一七四頁)「讀書不可不先立程限」、卷一八・113条(四一九頁)「殊不知致知之道、不如此急迫、須是寬其程限、大其度量、久久自然通貫」。

變孫請再看底文字。^(校1) 索近思錄披數板、云「也揀不得、便漏了他底也不得。」遂云「無極而太極、而今人都想像^(校2)有箇光明閃爍底物事在那裏。^(校3) 那不知本是說無這物事、只是有箇理、解如此動靜而已。及至一動一靜、便是陰陽。一動一靜、循環無端。^(校3) 太極動而生陽、亦只是從動處說起。其實、動之前又有靜、靜之前又有動。推而上之、其始無端。推而下之、以至未來之際、其卒無終。自有天地、便只是這物事在這裏流轉、一日便有一日之運、一月便有一月之運、一歲便有一歲之運、都只是這箇物事滾^(校5)、滾將去、如水車相似、一箇起、一箇倒、一箇上、一箇下。其動也、便是中、是仁。其靜也、便是正、是義。不動則靜、不靜則動。如人不語則默、不默則語、中間更無空處。又如善惡、不是善、便是惡。不是惡、便是善。^(校4) 聖人定之以中正仁義、便是主張這箇物事。蓋聖人之動、便是元亨。^(校5) 其靜、便是利貞、^(校5) 都不是閑底動靜。所謂繼天地之志、述天地之事、便是如此。如知得恁地便生、知得恁地便死、知得恁地便消、知得恁地便長、此皆是繼天地之志。隨他恁地進退消息盈虛、與時偕行、小而言之、飢食渴飲、出作入息。大而言之、君臣便有義、父子便有仁、此都是述天地之事。只是這箇道理、所以君子修之便吉、小人悖之便凶。這物事機關一下撥轉、便攔他不住、如水車相似、才踏發這機、更住不得。所以聖賢兢兢業業、一日二日萬幾、戰戰兢兢、至死而後知免。大化恁地流行、只得隨他恁地。故

日、存心養性、所以事天也。天壽不貳、修身以俟之、所以立命也。這與西銘都相貫穿、只是一箇物事。

〔校注〕

(校1) 楠本本は、「素」を「先生素」に作る。

(校2) 楠本本・朝鮮整版・正中書局本は、「想像」を「想象」に作る。

(校3) 楠本本・朝鮮整版・正中書局本は、「那」を「却」に作る。

(校4) 楠本本は、「説」を「設」に作る。

(校5) 楠本本・朝鮮整版・正中書局本は、「滾」を「袞」に作る。

(校6) 朝鮮整版は、「閑」を「間」に作る。

(校7) 底本は「所以」に作るが、楠本本・朝鮮整版・正中書局本・和刻本に依り改めた。

〔訳〕

夔孫は次に読むべき文章をお尋ねした。先生は『近思録』を取り出して、数丁めぐりながらおっしゃった。

朱子「なかなか選べないものだ。どれも漏らすわけにいかない。」

かくて先生はおっしゃった。

朱子「無極にして太極」というと、いま人はみな、何か光り輝くまばゆい物がそこにあるかのように想像する。そういう物があるのではなく、ただ理があつて、このように動靜を可能にしていることを言っているに過ぎないことを理解していない。「一動一靜」という段になると、陰陽だ。動となり靜となり、循環し

て始まりも終わりもない。

「太極動いて陽を生ず」というのも、動のところから説き起こしたに過ぎない。実際、動の前には静があり、静の前にはまた動がある。遡っていつてもどこが始まりということはなく、ずっと未来の果てまで推しはかっても、結局はどこが終わりということはない。天と地ができた時から、ただこれがここで繰り返し循環しているだけで、一日には一日の運ウツり、ひと月にはひと月の運り、一年には一年の運りというように、すべてはこれが運っているだけだ。ぐるぐる運っていつて、たとえば水車のように、こつちが起きればあつちが倒れ、こつちが上になればあつちが下になるというような具合だ。動は「中」であり「仁」、静は「正」であり「義」だ。動でなければ静、静でなければ動、ちょうど人が話さなければ黙っており、黙らなければ話しているというのと同じで、その中間にどちらでもないというところは無い。あるいは善悪のようなもので、善でなければ悪、悪でなければ善なのだ。「聖人は之を定むるに中正仁義を以てす」とは、このことを言っているのだ。

つまり、聖人の動は（『易』にいう）「元」「亨」であり、静は「利」「貞」であつて、いずれも無意味な動静ではない。（『西銘』にいう）天地の志を継いで、天地の事を述べるとは、このことなのだ。どうなれば生まれ、どうなれば死に、どうなれば衰え滅び、どうなれば育ち栄えるのかということを知ること、それがすべて天地の志を継ぐことなのであり、その天地の志に随つてこのように進退・生滅・満ち欠けを繰り返し、時と共に移ろいゆき、小事で言えば、飢渴すれば飲食し、外に出ては働き、家に入つては休息し、大事で言えば、君臣であれば義があり、父子であれば仁があるということ、これがすべて天地の事を述べると

いうことなのだ。ただこの道理は、「君子は之を修めて便ち吉、小人は之に悖りて便ち凶」というものだ。このからくりがひと度動き出せば、押しとどめることはできない。まるで水車のように、少しでも足で踏んで動かし始めたならば、もう止めることはできないのだ。だからこそ聖賢は「兢兢業業たれ、一日二日に万幾あり」といい、(曾子は)戦々兢兢と恐れ慎み、死に際してようやくその心配から免れるというのだ。大いなる化育の働きはこのようにめぐり続け、ただそれに随っていくしかない。だから(孟子も)「心を存し、性を養ふは、天に事ふる所以なり。夭寿うたが貳ふたわず、身を修めて以て之を俟つは、命を立つる所以なり」と言ったのだ。これは『西銘』と相通じるものであって、一つのことにはかならない。

〔注〕

(1) 索近思録披數板、ここより以下、朱熹の發言の切れ目となる「説來説去、只是這一箇道理」まで、同一場面の別記録が卷九四・111条(二三八七頁、記録者は黄義剛)に見える。

(2) 無極而太極 周敦頤『太極図説』。本条では、『近思録』卷一・1条に収められている『太極図説』を話題としている。

(3) 太極動而生陽 注(2)に同じ。

(4) 聖人定之以中正仁義 注(2)に同じ。

(5) 元亨利貞 『易』乾。

(6) 繼天地之志、述天地之事 張載『西銘』「知化、則善述其事。窮神、則善繼其志」。「知化」「窮神」は『易』繫辞下伝の言葉。

(7) 君子修之便吉、小人悖之便凶 注(2)に同じ。

(8) 兢兢業業、一日二日萬幾 『尚書』 皋陶謨。

(9) 戰戰兢兢、至死而後知免 『論語』 泰伯。

(10) 存心養性、所以立命也 『孟子』 尽心上「存其心、養其性、所以事天也。夭壽不貳、修身以俟之、所以立命也」。

如云、五行、一陰陽也。陰陽、一太極也。太極、本無極也。五行之生也、各一其性。無極之真、二五之精、妙合而凝、乾道成男、坤道成女。二氣交感、化生萬物、萬物生生、而變化無窮焉。便只是天地之塞吾其體、天地之帥吾其性、只是說得有詳略緩急耳。而今萬物到秋冬時各自斂藏、便恁枯瘁。忽然一下春來、各自發生條暢、這只是一氣、一箇消、一箇息。那箇滿山青黃碧綠、無非天地之化流行發見。而今自家吃他、著他、受用他、起居食息都在這裏、離他不得。所以仁者見之便謂之仁、智者見之便謂之智、無非是此箇物事。繼之者善、便似日日裝添模樣。成之者性、便恰似造化都無可做了、與造化都不相關相似。到得成之者性、就那上流行出來、又依前是繼之者善。譬如穀、既有箇穀子、裏面便有米、米又會生出來。如果子皮裏便有核、核裏便有仁、那仁又會發出來。人物莫不如此。如人方其在胞胎中、受那父母之氣、則是繼之者善。及其生出來、便自成一箇性了、便自會長去、這後又是繼之者善、只管如此。仁者謂之仁、便是見那發生處。智者謂之智、便是見那收斂處。百姓日用而不知、便是不知所謂發生、亦不知所謂收斂、醉生夢死而已。周先生太極通書、便

只是滾這幾句。^(校3)易之爲義、也只是如此。只是陰陽交錯、千變萬化、皆從此出、故曰易有太極。^(校3)這一箇便生兩箇、兩箇便生四箇、四箇便生八箇、八箇便生十六箇、十六箇便生三十二箇、三十二箇便生六十四箇。故八卦^(校3)定吉凶、吉凶生大業。聖人所以說出時、只是使人不迷於利害之途耳。」

〔校注〕

(校1) 楠本本・朝鮮整版・正中書局本・和刻本は、「斂」を「斂」に作る。

(校2) 楠本本・朝鮮整版・正中書局本は、「吃」を「喫」に作る。

(校3) 楠本本は、「滾這幾句」を「衰幾句」に作る。正中書局本は、「滾這幾句」を「衰這幾句」に作る。

〔訳〕

『太極図説』の「五行は一陰陽なり。陰陽は一太極なり。太極は本無極^{もと}なり。五行の生ずるや、各おの其の性を一にす。無極の真・二五の精、妙合して凝り、乾道は男と成り、坤道は女と成る。二氣交感して万物を化生し、万物は生生して変化窮まり無し」というのは、『西銘』の「天地の塞は吾が其の体、天地の帥は吾が其の性」と同じこと、ただ表現のしかたに詳略・緩急の違いがあるだけだ。いま万物は秋冬の時期になればそれぞれ収斂して蓄える状態になつて枯れていくが、ひとたび春になると、またそれぞれ生まれて伸びてゆく。これもただひとつの気なのであつて、(同じ一氣が)衰え消えたり生まれ伸びたりしているに過ぎない。あの山いっぱい多彩ないるどりも、全ては天地の移りゆく変化の現れだ。いま我々はそれ

を食べ、それを着、それを受けとり用い、日常生活のあらゆる動作は全てそこにあり、それから離れることはできない。それ故（『易』に）「仁者は之を見ては便ち之を仁と謂い、智者は之を見ては便ち之を智と謂う」というように、全てがそれに他ならないのだ。「之を継ぐ者は善」は、日々付け加えている様子、「之を成す者は性」は、あたかも造化はなすべきことを終え、もう造化とは全く関わりがないかのようである。しかし「之を成す者は性」の段階に到つても、そこで生み出され続ける変化は、依然として「之を継ぐ者は善」なのだ。例えば籾米のようなもので、籾があればその中には米があり、その米がまた生長を始める。あるいは果実のように、皮の中には種があり、種の中にはさねがあり、そのさねがまた生長を始める。人や物もこれと同じだ。人は、胎内に在る時に父母の氣を受けるが、それが「之を継ぐ者は善」だ。生まれ出て来れば、自ずとひとつの「性」を「成」し、自ずと成長してゆくが、その後もやはり「之を継ぐ者は善」なのであって、ひたすらそれを繰り返す。「仁者は之を仁と謂う」のは、その生長のところを見るからであり、「智者は之を智と謂う」のは、その収斂のところを見るからである。「百姓は日々用いて知らず」とは、所謂生長も収斂も知らずに、酔生夢死、ぼんやりと一生を終えるということなのだ。周（敦頤）先生の『太極図説』『通書』は、『易』のこの数句の意味を混在させている。「易」の（字の）意味もこれに他ならない。ただ陰陽が交錯して生じる千変万化も、すべてここから出て来るのであり、それ故「易に太極有り」というのだ。この一が二を生み、二が四を生み、四が八を生み、八が十六を生み、十六が三十二を生み、三十二が六十四を生む。だから「八卦は吉凶を定め、吉凶は大業を生ず」なのだ。聖人がはつきりと言葉にするのは、ただ人々を利害のみを問題にするような道に迷わせないために他ならない。」

〔注〕

(1) 五行く而變化無窮焉 周敦頤『太極図説』、『近思録』卷一・1条に収められる。

(2) 天地之塞吾其體、天地之帥吾其性 張載『西銘』。

(3) 仁者見之便謂之仁、智者見之便謂之智 『易』繫辞上傳「一陰一陽之謂道、繼之者善也、成之者性也。仁者見之謂之仁、知者見之謂之知、百姓日用而不知、故君子之道鮮矣」。

(4) 繼之者善 注(3) 参照。

(5) 成之者性 注(3) 参照。

(6) 如人方其在胞胎中く這後又是繼之者善、只管如此 同一場面の問答を記録したと思われる卷九四・111条では少しく異同がある。解釈の参考として卷九四の該当箇所を引用しておく。網掛けは本条とは異なる文字。「且如人方其在胞胎中、受父母之氣、則是繼之者善。及其生出、又自成一箇物事、成之者性也。既成其性、又自繼善、只是這一箇物事、今年一年生了、明年又生出、副當物事來、又繼之者善、又成之者性、只是這一箇物事滾將去」(二三八八頁)。

(7) 百姓日用而不知 注(3) 参照。

(8) 易有太極 『易』繫辞上傳「是故易有太極、是生兩儀、兩儀生四象、四象生八卦、八卦定吉凶、吉凶生大業」。

(9) 八卦定吉凶、吉凶生大業 注(8) 参照。

(30条前半担当 松野 敏之)

少頃、又舉誠幾德一章、說云「誠無爲、只是自然有實理恁地、不是人做底、都不曾犯手勢。幾善惡、便是心之所發處有箇善有箇惡了。德便只是善底、爲聖爲賢、只是這材料做。」

〔訳〕

しばらくして、さらに『通書』の「誠幾德」の一章を取り上げて仰った。

朱子「誠は為すこと無し」というのは、ただ自然と実なる理がこのように在るということ、人為ではなく、まったく手を加えていない。「幾に善悪あり」とは、心が発動すると善と悪とが出て来るということだ。

「徳」はただただ善なるものであり、聖人や賢人となるのも、これを素もとにしてなるのだ。」

〔注〕

(1) 誠幾德一章 周敦頤『通書』「誠無爲。幾善惡。徳、愛曰仁、宜曰義、理曰禮、通曰智、守曰信。

性焉安焉之謂聖、復焉執焉之謂賢。發微不可見、充周不可窮之謂神。』『近思録』卷一・2条に引く。

(2) 犯手勢 人為的な操作を加えること。卷三六・41条(九五六頁)「故謂絶四之外、下頭有一不犯手勢自然底道理、方真是義」、卷六八・63条(一六九六頁)「蓋易之書、誠然是潔淨精微。他那句話都是懸空説在這裏、都不犯手。如伊川説得都犯手勢、引舜來做乾卦、乾又那裏有箇舜來。當初聖人作易、又何嘗説乾是舜」。

又舉第三大本達道章說云「未發時便是那靜、已發時便是那動。方其靜時、便是有箇體在裏了。如這桌子未用時、已有這桌子在了。及其已發、便有許多用、一起一倒、無有窮盡。若靜而不失其體、便是天下之大本立焉、動而不失其用、便是天下之達道行焉。若其靜而或失其體、則天下之大本便昏了、動而或失其用、則天下之達道便乖了。說來說去、只是這一箇道理。」

〔訳〕

さらに、『近思録』第三条の「大本達道」についての章を取上げて仰った。

朱子「未発の時は静、已発の時は動だ。静の時には、すでに体（本体・本質）がその中に存在する。この机で言えば、使用していない時にもすでにこの机は存在している。已発の状態になると、数多の用（作用・用途）が次々と現れ尽きる事が無い。もし静の状態で体を見失わなければ「天下の大本」は立ち、動の状態で用を過たなければ「天下の達道」は行われる。もし静の状態で体を見失えば「天下の大本」はぼんやりとしてしまい、動の状態で用を過てば「天下の達道」から乖離してしまう。あれこれ言っても、結局はただひとつの道理なのだ。」

〔注〕

(1) 第三 『近思録』（道体篇）における章の順番。卷九四・111条には「近思録第二段説誠無爲幾善惡」

という表現が見える。『近思錄』道体篇第三段は「伊川先生曰、喜怒哀樂之未發、謂之中。中也者、言寂然不動者也。故曰天下之大本。發而皆中節、謂之和。和也者、言感而遂通者也。故曰天下之達道」(『遺書』卷二五・30条)。

(2) 大本達道 『中庸』(章句首章)「喜怒哀樂之未發、謂之中。發而皆中節、謂之和。中也者、天下之大本也。和也者、天下之達道也」。

夔孫問云「此箇道理、孔子只說一陰一陽之謂道、繼之者善、成之者性、^(校1)都不會分別出性是如何。孟子乃分別出、說是有此四者、然又只是以理言。到周先生說方始盡、方始見得人必有是四者、這四者亦有所附著。」先生曰「孔子說得細膩、說不會了。孟子說得粗、^(校2)疏略、只是說成之者性、不會從原頭推說來。然其界分、自孟子方說得分曉。」

〔校注〕

(校1) 楠本本・朝鮮整版・正中書局本は「都」を「却」に作る。

(校2) 楠本本は「此」の字を欠く。

(校3) 楠本本・朝鮮整版・正中書局本は「粗」を「麤」に作る。

〔訳〕

夔孫「こういつた道理について、孔子はただ「一陰一陽を之れ道と言ふ、之を継ぐ者は善、之を成す者は性」と言うだけで、性がどのようなものであるかをことさらに他と区別して明確にしていまません。孟子になつてはじめて性を区別して、性には（仁義礼智の）四者があることを説明しましたが、やはり理でもつて説明したに過ぎません。周（敦頤）先生に到つてはじめて説明のしかたが万全となり、人に必ずこの四者があり、またこの四者には附着する所があることが分かりました。」

朱子「孔子の説きかたは細々としていて、全てを説き尽してはいない。孟子は説きかたが粗く大雑把なので、（孔子のいった）「之を成す者は性」としての性だけを説き、大本のところはまだ遑つて説明してはいない。しかし区別ということでは、孟子がはじめて明確にしたのだ。」

〔注〕

（一）夔孫問云 卷四・61条（六九頁）は同一場面の別記録か（記録者は黄義剛）。「問、孔子已說繼之者善、成之者性、如何人尚未知性。到孟子方才說出、到周先生方說得盡。曰、孔子說得細膩、說不會了。孟子說得麤、說得疎畧。孟子不會推原原頭、不會說上面一截、只是說成之者性也。」

（二）一陰一陽く成之者性 『易』繫辭上伝。

陳仲蔚因問「龜山說、知其理一、所以爲仁、知其分殊、所以爲義。仁便是體、義便是用否。」曰「仁只是流出來底、義是合當做底。如水、流動處是仁。流爲江河、匯爲池沼、便是義。如惻隱之心便是仁。愛父母、愛

兄弟、愛鄉黨、愛朋友故舊、有許多等差、便是義。且如敬、只是一箇敬。到敬君、敬長、敬賢、便有許多般樣。禮也是如此。如天子七廟、諸侯五廟、這箇便是禮。其或七或五之不同、便是義。禮是理之節文、義是事之所宜處。呂與叔說天命之謂性云、自斬而總、喪服異等、而九族之情無所憾。自王公至皂隸、儀章異制、而上下之分莫敢爭。自是天性合如此。且如一堂有十房父子、到得父各慈其子、子各孝其父、而人不嫌者、自是合如此也。其慈、其孝、這便是仁。各親其親、各子其子、這便是義。這箇物事分不得流出來、便是仁。仁打一動、義禮智便隨在這裏了。不是要仁使時、義却留在後面、少間放出來。其實只是一箇道理、論著界分、便有許多分別。且如心性情虛明應物、知得這事合恁地、那事合恁地、這便是心。當這事感則這理應、當那事感則那理應、這便是性。出頭露面來底便是情。其實只是一箇物事。而今這裏略略動、這三箇便都在、子細看來、亦好則劇。」

〔校注〕

(校1) 楠本本は「日」を「先生日」に作る。

(校2) 楠本本は「云」の字が無い。

(校3) 楠本本は「義却留在後面」を「又却留在後面」に作る。

(校4) 楠本本は「其」を「便是」に作る。

〔訳〕

そこで陳仲蔚(華)が質問した。

「龜山（楊時）は「（程子の「理一分殊」の）理一を知れば仁であり、分殊を知れば義である」と述べていますが、仁が体（本体）で、義は用（作用）ということなのでしょうか。」

朱子「仁は自ずと流れ出てくるものであり、義はどうしてもそうでなければならぬものだ。水に喩えるならば、流動しているのが仁であり、流れれば河川となり、溜れば池沼となるのが義だ。また、惻隱の心は仁であるが、父母を愛し、兄弟を愛し、同郷を愛し、友人知己を愛すというように様々な差等があるのが義なのだ。例えば敬の修養にしても、本来はただひとつの敬に他ならないが、君を敬し、年長者を敬し、賢者を敬するというような段になると、様々な有り様が出て来る。礼も同様だ。「天子は七廟、諸侯は五廟」というのは礼であるが、その七であったり五であったりと違いがあるのが義なのだ。礼は理の節目であり、義は物事の適切なところだ。呂与叔（大臨）は『中庸』の「天命を之れ性と謂ふ」について、「斬衰から総麻に至るまで、喪服は等級を異にするからこそ、九族の情は慼むことが無い。王公から賤官に至るまで、礼儀作法は制度を異にするからこそ、上下の分を敢えて犯そうとすることは無い」と言っているが、天性として自ずとそうなのだ。たとえば、一族に十組の親子がいたとして、親はそれぞれ自分の子を慈しみ、子はそれぞれ自分の親に孝を尽しても、誰も咎めないのは、それが自然のことだからだ。慈しみや孝それ自体は仁であり、それぞれ自分の親を親とし、自分の子を子とするのが義なのだ。区別のできないままに流れ出るのが仁であるが、仁がひとたび動けば、義も礼も智もそれにしたがってそこにあるのだ。仁が働く時に、義は後ろで待っていて、しばらくしてから出て来るというものではない。実際はただ一箇の道理なのであり、区別を論ずるときに様々な違いが出て来るだけだ。たとえば、心と性と情についていえば、虚明に物事に応

じ、この事にはこう対応し、あの事にはこう対応すると判断できるのは心だ。この事に感ずればこの理が応じ、あの事に感ずればあの理が応ずると言うのが性だ。そしてそれらが外に現れ出てきたのが情なのだ。とはいえ、実際にはただひとつのことに過ぎない。いまほんの少し動けば、この三者はもうそろって存在する。子細に考えてみると、なかなか面白いものだ。」

〔注〕

(1) 陳仲蔚 陳華、字仲蔚。『門人』二二二頁。なお、この一段の問答と卷九八・104条(二五二七頁、記録者黄義剛)は同一場面の別記録と考えられるが、ここでは質問者は「林子武」となっている。

(2) 知其理一、所以爲義 『龜山集』卷二一・語錄二(京師所聞)「河南先生言理一而分殊。知其理一所以爲仁、知其分殊所以爲義。…或曰、如是則體用果離而爲二矣。曰、用未嘗離體也。」

(3) 天子七廟、諸侯五廟 『礼記』王制、礼器篇。

(4) 自斬至總、莫敢爭 呂大臨『礼記解』(理学叢書『藍田呂氏遺著輯校』二七一頁)。なお、注(1)で挙げた卷九八・104条では「中庸集略呂與叔所云」とある。

(5) 則劇 おもしろい(こと・もの)。卷二二一・16条(二九二三頁)「光陰易過、一日減一日、一歳減一歳、只見老大。忽然死著、思量來這是甚則劇、恁地悠悠過了」。

又舉邵子性者道之形體處、曰「道雖無所不在、然如何地去尋討他。只是回頭來看、都在自家性分之内。自家

有這仁義禮智、便知得他也有仁義禮智、千人萬人、一切萬物、無不是這道理。推而廣之、亦無不是這道理。他說道之形體、便是說得好。^(校1)

〔校注〕

〔校1〕楠本本は末尾に「以上夔孫自録、録下見諸録。」という小字注がある。

〔訳〕

また、邵子（雍）の「性は道の形体」という箇所を挙げて仰った。

朱子「道はあらゆる所に存在するとはいえ、どこに尋ね求めればいいのか。ひるがえってみれば、すべて自分自身の性の内に在るのだ。自分にこの仁義礼智があるのであれば、他者にも仁義礼智があることが分かる。千人万人、一切万物、この道理でないものは無い。どれだけ推し広げていっても、やはりこの道理に他ならないのだ。彼は「道の形体」と言ったが、うまい言い方だ。」

〔注〕

〔1〕邵子性者道之形體 邵雍『伊川擊壤集』自序。

（30条後半担当 小池直）

〔一六・31〕^(校1)

林子武初到時、先生問義剛云「在何處安下。」^(校2)曰「未曾移入堂長房。」^(校3)曰「它便是有思量底。」^(校4)蘇子容押花^(校5)^(校6)^(校7)

字常要在下面、後有一人官在其上、却挨得他花字向上面去。他遂終身悔其初無思量。不合押花字在下。」及包顯道等來、遂命子武作堂長、後竟不改。「義剛。」

〔校注〕

(校1) 楠本本は本条を卷一一七(一六一九頁)に収める。

(校2) 楠本本は「在」の前に「子武」が入る。

(校3) 楠本本は「曰」の前に「劉」が入る。

(校4) 楠本本は「曰」を「先生曰」に作る。

(校5) 楠本本は「它便」を「也須」に作る。

(校6) 楠本本は「是」の後に「个」が入る。

(校7) 楠本本は「上」を「下」に作り、傍らに「恐是上字」との書き込みがある。

(校8) 楠本本は「下」の後に「面」が入る。

〔訳〕

林子武(夔孫)が初めてやって来た時、先生は(黄)義剛に訊ねられた。

朱子「(子武は)どこの部屋に落ち着いたかね。」

義剛「まだ堂長(学舎の主任)の部屋には移っておりません。」

朱子「彼(子武)は思慮深い人物だ。むかし蘇子容(頌)は花押をいつも下段に記すようにしていたが、

後で上役の官吏が出てきて、結果的にその人の花押を上段に押しやってしまった。それ以来彼は生涯自分の

思慮の足らなさを悔いたという。花押は下段に記すものではないと。」

包頭道(揚)らがやつて来ると、子武を堂長に任命し、後々まで改めなかつた。〔記録者 黄義剛〕

〔注〕

(1) 蘇子容 蘇頌(一〇二〇—一一〇二)、字子容。北宋、泉州の人。『資料索引』四三二五頁、『宋史』卷三四〇、『学案』補遺卷二。朱熹は彼の氣質を柔徳の勝るものと評している。卷八一・170条(二一三七頁)「人之資稟自有柔徳勝者、自有剛徳勝者。如本朝范文正公富鄭公輩、是以剛徳勝。如范忠宣范淳夫趙清獻蘇子容輩、是以柔徳勝」。

(2) 却挨得他花字向上面去 行政文書における署名は、高官ほど左側(下段)に記す。

〔校1〕一六・32

問^(校2)「承先生賜教讀書之法、如今看來、聖賢言行、本無相違。其間所以有可疑者、只是不逐處研究得通透、所以見得牴牾。若真箇逐處逐節逐段見得精切、少間却自到貫通地位。」曰「固是。如今若苟簡看過、只一處、便自未曾理會得了、却要別生疑義、徒勞無益。」〔訓木之^(校3)〕

〔校注〕

(校1) 楠本本は本条を卷一一七(一六一八頁)に収める。

(校2) 楠本本は「問」の後に「木之」が入る。

(校3) 楠本本は「木之」の後に「自録」が入る。

〔訳〕

質問「先生より読書法をご教示いただきました。いま考えますに、聖賢の言行には本来、相違うところはないはずです。それなのに読んでいて疑問を抱くことがあるのは、それぞれの箇所ごとにすつきりするまで十分突き詰めておらず、それ故に理解に矛盾が生じるからに他なりません。もし本当に箇所ごと節ごと段ごとに精密にして切実な理解ができれば、やがて全てがすつきり通じ合う理解へと達しましょう。」

朱子「もちろんその通りだ。いい加減に読み過ごせば、ただの一箇所とてきちんと理解しきれず、むしろ余計な疑問を生み出すことになる。徒勞であり、無益なことだ。」

〔錢木之への訓戒。〕

〔注〕

(1) 木之 錢木之、字子山。『門人』三四九頁、『学案』補遺卷六九。

〔一六・三三〕

慶元丁巳三月、見先生於考亭。先生曰「甚荷遠來、然而不是時節。公初從何人講學。」曰「少時從劉衡州

問學。」曰「見衡州如何。」曰「衡州開明大體、使人知所向慕。」曰「如何做工夫。」曰「却是無下手處。」曰

「向來亦見廬陵諸公有問目之類、大綱寬緩、不是斬釘截鐵。真箇可疑可問、彼此只做一場話說休了。若如此悠悠、

恐虛過歲月。某已前與朋友往來、亦是如此。後來欽夫說道凡肯向此者、吾二人只如此放過了、不特使人汎然來行一遭、便道我會從某人處講論、一向胡說、反爲人取笑、亦是壞了多少好氣質底。若只悠悠地去、可惜。今後須是截下看。晚年要成就得一二人、不妨是吾輩事業。自後相過者、這裏直是不放過也。」

〔校注〕

〔校1〕楠本本は本条を卷一一七（一六一九頁）に収める（乱丁の為、一六一七頁に続く）。

〔校2〕楠本本は「遠來」の後に「此意良厚」が入る。

〔校3〕楠本本は「公」の前に「又曰」が入る。

〔校4〕楠本本は「曰」を「先生曰」に作る。

〔校5〕底本は「寛」を「竟」に作るが、楠本本・朝鮮整版・正中書局本・和刻本に従って改めた。

〔校6〕楠本本は「多少」を「許多」に作る。

〔訳〕

慶元丁巳（一一九七）の三月、考亭書院にて先生にお会いした。

朱子「遠方よりのお運び忝ないが、あいにくの時期である。貴公は当初、どなたに師事していたのかな。」

（曾）祖道「若い頃は劉衡州（清之）の下で学問をしておりました。」

朱子「衡州をどう見るかね。」

祖道「衡州は大まかな輪郭を明らかにして、向かうべき方向を自覚させてくれました。」

朱子「どのように修養をするのかね。」

祖道「それについては、具体的な着手点がありません。」

朱子「以前にも廬陵の諸君の問答類を見たが、大綱は弛緩し、ずばりとした明快さを欠くものであった。本当に疑問に思い問うべきことも、互いにその場限りの話題にしてお終いにしてしまっている。あのように悠長にしていれば、恐らくは虚しく歳月を過ごすこととなる。私も以前は、そんなふうにならなうと交流していたが、後に欽夫（張栻）に言われてしまった。「そもそも進んで斯学に志す者に対して、我々二人がただただこのように甘くしていたのでは、彼らをあちこちうろろしては、自分がかつて誰そのところまで学問をしたと言ひ、ひたすらいい加減なことを言つては笑ひものにさせてしまふだけでなく、多くの良き資質の者たちを台無しにもしてしまつてゐるのだ。のんびりと悠長にしているだけならば、惜しむべきことだ。今後はきつぱりと厳しくして、晩年に一人二人なりともものにできれば、それを我々の仕事としてもいいではないか」と。だからこの後に入門した者には、ここでは甘くしないのだよ。」

〔注〕

(1) 慶元丁巳 慶元三年（一一九七）、朱熹六八歳。なお朱熹は前年十二月、いわゆる慶元偽学の禁の一環として落職罷祠に処されており、本条の「不是時節」もその状況を指す。

(2) 劉衡州 劉清之（一一三三—一一八九）、字子澄。江西・廬陵の人。朱熹友人。知衡州を務めた。

『資料索引』三九七五頁、『宋史』卷四三七、『学案』卷五九、『小学』編纂の際にも、朱熹は劉清之の用意したものに故事を増補し、着実な徳行に重きを置いてまとめている。

(3) 廬陵 江西の吉州廬陵県。劉清之、曾祖道の出身地。陸九淵も江西の人。

(4) 斬釘截鐵 ずばり簡潔明快なこと、禪語に由来する語。『景德伝灯録』卷一七・道膺禪師「師謂衆曰、學佛法底人、如斬釘截鐵始得」。卷五一・5条(二二一九頁)「看來惟是孟子說得斬釘截鐵」。

(5) 悠悠 のんびりと悠長に構えること。朱熹はこの表現で学ぶ者たちの怠慢を繰り返し戒めている。卷一一五・33条(二七七九頁)「悠悠於學者最有病」。

祖道又曰「頃年亦嘗見陸象山。」先生笑曰「這却好商量。公且道象山如何。」曰「象山之學、祖道曉不得、更是不敢學。」曰「如何不敢學。」曰「象山與祖道言、目能視、耳能聽、鼻能知香臭、口能知味、心能思、手足能運動、如何更要甚存誠持敬、硬要將一物去治一物。須要如此做甚。泳歸舞雩、自是吾子家風。祖道曰、是則是有此理、恐非初學者所到地位。象山曰、吾子有之、而必欲外鑠以爲本、可惜也。祖道曰、此恐只是先生見處。今使祖道便要如此、恐成猖狂妄行、蹈乎大方者矣。象山曰、纏繞舊習、如落陷阱、卒除不得。」先生曰「陸子靜所學、分明是禪。」又曰「江西人大抵秀而能文。若得人點化、是多少明快。蓋有不得不任其責者。然今黨事方起、能無所畏乎。忽然被他來理會、礙公進取時如何。」曰「此是自家身上、進取何足議。」曰「可。便遷入精舍。」〔以下訓祖道。〕

〔校注〕

(校1) 和刻本は「商」を「商」に作る。

(校2) 楠本本は「日」を「先生曰」に作る。

(校3) 楠本本は「日」の前に「祖道對」が入る。

(校4) 楠本本は「日」の前に「對象山」が入る。

(校5) 楠本本・朝鮮整版・正中書局本・和刻本は「繞」を「遶」に作る。

(校6) 楠本本は「日」の前に「對」が入る。

(校7) 楠本本・朝鮮整版・正中書局本は「上」の後に「事」が入る。

〔訳〕

祖道「先頃、陸象山（九淵）にも会いました。」

先生は笑って仰った。

朱子「それは話が早いな。貴公は象山をどう評価するか、まずは言ってみなさい。」

祖道「象山の学問は祖道には理解できませんし、学ぼうとは思いません。」

朱子「どうして学ぼうと思わないのかね。」

祖道「象山は祖道に言うのです。「目は視、耳は聴き、鼻は臭いを嗅ぎ、口は味を知り、心は思い、手足は運動することができるのに、それ以上どうして誠を存し敬を持するなどといったことをしようとし、無理に一物によって一物を治めるようなことをするのか。そんなことを求めて何をしようというのか。雨乞い壇より唱いながら帰る（曾点の望む）境地こそ、吾儒の伝統である」と。祖道が「そうした道理もありましよ

うが、恐らくは初学者の達し得る境地ではありますまい」と応じれば、象山は「君は自分でそれを持っているのに、いつも外から持ってきて本としようとする。惜しむべきことだ」と言います。祖道わたしが「それはおそらく先生の見方に過ぎますまい。いま仮に祖道わたしが先生の仰るようにしようとするれば、恐らくは『莊子』に言う『猖狂妄行して、大方を踏む（気ままに行動して道を実践する）』になつてしまひましょう」と言うのと、象山は「これまでの古い考え方にすっかりとらわれてしまつていて、まるで落とし穴に陥っているかのようだ。救いがたい」と言つておりました。」

朱子「陸子静（九淵）の学問は、明らかに禅だ。」

朱子「江西の人は大抵が優秀で文章に長じている。もし教え導いてくれる人を得れば、どれほど明快になることか。やはり誰かその責務を担わなければならないのだ。とはいえ、今はちようと党綱が起こっている。貴公は畏れずにいられるのか。突然巻き込まれて、将来を妨げられた時にはどうする。」

祖道「それは私の一事上のこと、左様なことは論ずるに及びません。」

朱子「よろしい。すぐに精舎へ入りなさい。」

〔以下、曾祖道への訓戒。〕

〔注〕

(1) 祖道 曾祖道、字叔子。江西・廬陵の人。『門人』二二七頁、『学案』卷六九。

(2) 目能視 『象山語録』卷上・27条にも「居象山多告學者云、女耳自聰、目自明、事父自能孝、事兄自能弟、本無欠闕。不必他求、在自立而已」とある。

(3) 泳歸舞雩 『論語』先進「暮春者春服既成、冠者五六人、童子六七人、浴乎沂、風乎舞雩、詠而歸。」

夫子喟然嘆曰、「吾與點也」。江西の學風と會点との問題については、卷一一六・6条（二七八八頁）「公那江西人、只管要理會那漆雕開與會點、而今且莫要理會」。

(4) 是則是　　そうだとしても。「雖然是」と同義。

(5) 外鑠　　『孟子』告子上「仁義禮智非由外鑠我也。我固有之也」。

(6) 猖狂妄行、蹈乎大方　　『莊子』山木「猖狂妄行、乃蹈乎大方」。

(7) 陷阱　　『中庸』(章句七章)「人皆曰予知。驅而納諸罟獲陷阱之中、而莫之知辟也」。

(8) 黨事　　一連の道學彈圧(慶元偽學の禁)を指す。

(31) 33条担当　阿部 光麿

【校¹】
【一一六・34】

先生謂祖道曰「讀書、且去鑽研求索。及反覆認得時、且蒙頭去做、久久須有功效。吾友看文字忒快了、却不沉潛見得他子細意思。莫要一領他大意、便去搏摸、此最害事。且熟讀、就他注解爲他說一番。說得行時、却又爲他精思、久久自落窠臼。」^(校²)略知瞥見、便立見解、終不是實。恐他時無把握、虛費心力。」

〔校注〕

(校1) 楠本本は、本条を卷一一七(二六一八頁)に収める。

(校2) 楠本本は、「看」を「者」に作る。

(校3) 楠本本は、「窠臼」を「窠旧」に作る。

[訳]

先生が(曾) 祖道わたしにおつしやつた。

朱子「読書は、先ずはじっくりと深く考究しようとする事だ。繰り返し体認できるに及んで、なおかつそれに没頭してゆけば、久しくして必ず効果が現れるはずだ。君は読むのが速すぎて、子細な意味までじっくりと読み取ることができていない。ちよつと大意をつかむや、憶測を走らせるようなことをしてはいけない。それが一番有害だ。しばらくは熟読し、注解に従つていちど説明してみることだ。うまく説明できた時も、さらに熟考してみる。そうやって長く続けていくうちに自ずと腑に落ちることだろう。ちらりと読んで大まかに理解しただけで、すぐさま自分の見解を立てるようでは、結局は切実な理解ではない。恐らくは他日何も分からなくなり、むだに心労を費やすことだろう。」

[注]

(1) 搏摸 当て推量する、憶測を働かせる。卷九七・22条(二四八四頁)「須實見得、方説得親切。如一椀燈、初不識之。只見人説如何是燈光、只恁地搏摸、只是不親切。只是便把光做燈不得」。

(2) 落窠臼 類似の表現として、卷二二一・36条(二九二九頁)「讀書之法、只要落窠糟。今公們讀書、盡不曾落得那窠糟、只是走向外去思量、所以都説差去」が挙げられる。「落窠糟」は、すたと腑に落ちるの意か。

問進徳之方。^(校2) 曰「大率要修身窮理。^(校3) 若修身未上未有工夫、亦無窮理處。」問「修身如何。」曰「且先收放心。^(校4) 如心不在、無下手處。要去體察你平昔用心是爲己爲人。若讀書計較利祿、便是爲人。」

〔校注〕

(校1) 楠本本は、本条を卷一一七(一六一八頁)に収める。

(校2) 楠本本は、「問」の字を欠く。

(校3) 楠本本は、「曰」を「先生曰」に作る。

(校4) 楠本本は、「利祿」の前に「求」が入る。

〔訳〕

徳を向上させる方法を質問した。

朱子「大まかにいえば、身を修めて理を窮めることだ。とはいえ、身を修めるところに力を注ぐことがなければ、理も窮めようがない。」

質問「身を修めるには、どうすればいいのでしょうか。」

朱子「まずは、放心を収めることだ。心ここにあらずであれば、手の下しようがない。君が平生 心を向

けているところが、「己の為」か「人の為（人に見せる為）」か、よく考えてみることだ。読書をして利禄を計ろうというがごとき、それは「人の為」だ。

〔注〕

(1) 修身 『大学』(章句経) 「欲齊其家者、先修其身。欲修其身者、先正其心」。

(2) 窮理 『大学』(章句格物補伝) 「所謂致知在格物者、言欲致吾之知、在即物而窮其理也」。

(3) 放心 『孟子』告子上 「學問之道無他、求其放心而已矣」。

(4) 爲己爲人 『論語』憲問 「子曰、古之學者爲己、今之學者爲人」。

〔校¹〕
一一六・36〕

「資稟純厚者、須要就上面做工夫。」問「如何。」曰「人生與天地一般、無些^(校²)欠缺處^(校³)。且去子細看秉彜^(校⁴)常性^(校¹)是如何、將孟子言性善處看是如何善。須精細看來。」

〔校注〕

(校1) 楠本本は、本条を卷一一七(二六一八頁)に収める。

(校2) 和刻本は、「些」を「此」に作る。

(校3) 楠本本・正中書局本・朝鮮整版は、「缺」を「闕」に作る。

(校4) 朝鮮整版は、「常」を「恒」に作る。

〔訳〕

朱子「資質が純粹で恵まれている者は、その良き資質に即して更に磨きをかけるよう努めなければならぬ。」

質問「それは、どういうことでしょうか。」

朱子「人は生まれながらにして天地と同じであつて、いささかも欠けたところなどないものだ。先ずは子細に「秉彝（天から与えられた不変の人の道を守ること）」や常なる性とはどういうことを考え、孟子が「性善」を説いた箇所についてどうして善なのかを考えていくのだ。必ず精密に細かく考えなければいけない。」

〔注〕

(1) 秉彝 『詩』大雅・烝民「天生烝民、有物有則。民之秉彝、好是懿德」。

(2) 孟子言性善處 『孟子』告子上。

〔一六・37〕

一日拜別、先生曰「(校2)歸去各做工夫、他時相見、却好商量也。某所解語孟和訓話(校4)注在下面。要人精粗本末、字字爲咀嚼過。此書、某自三十歲使下工夫、到而今改猶未了。不是草草看者。(校5)且歸子細。(校6)」

〔校注〕

(校1) 楠本本は、本条を卷一一七(一一六一八頁)に収める。

(校2) 楠本本は、「拜別」の後に「先生」が入る。

(校3) 楠本本は、「曰」を「云」に作る。

(校4) 楠本本・正中書局本・朝鮮整版は、「語」を「論」に作る。

(校5) 楠本本は、「看者」を「者看」に作る。

(校6) 楠本本は、末尾に「以上並祖道自録」の小字注が入る。

〔訳〕

ある日、別れの挨拶に伺ったとき、先生が言われた。

朱子「帰郷してもそれぞれ学問に努めることだ。その方が(ここでずっと一緒に講学しているよりも)他日再会した時に、むしろ実りある話ができるだろう。私が解釈した『論語』『孟子』には、訓詁・注釈を経文の下に付してある。精粗本末、一字一句噛み砕くように理解してもらいたいがためだ。これらの書は、私は三十歳の頃にすでに着手し、今に至るまで改め続け、未だに完成していない。短期間でいいかげんに読んだものではない。帰ったら子細に読んでみなさい。」

曾兄問「讀大學、已知綱目次第了。然大要用工夫、恐在敬之一字。前見伊川說敬以直內、義以方外處。」先生曰「能敬以直內矣、亦須義以方外。能知得是非、始格得物。不以義方外、則是非好惡不能分別、物亦不可格。」又問「恐敬立則義在其中。伊川所謂⁽⁴⁾彌諸中、彪諸外、是也。」曰「雖敬立而義在、也須認得實、方見得。今有人雖胸中知得分明、說出來亦是見得千了百當、及應物之時、顛倒錯謬、全是私意、亦不知。聖人所謂敬義處、全是天理、安得有私意。今釋老能立箇門戶恁地、亦是它從旁窺得近似。他所謂敬時、亦却是能敬、更有箇⁽⁵⁾笠影之喻。」

〔校注〕

(校1) 本条は、楠本本の「訓門人」には収められていない。

(校2) 朝鮮整版は、「箇」の字を欠く。

〔訳〕

曾兄(祖道)「『大学』を読んで、学問の綱目と順序を理解しました。しかし、最も力を注ぐべきことはやはり「敬」の一字にあるのではないでしょうか。以前、伊川(程頤)が『易』の「敬以て内を直くし、義以て外を方にす」について論じた箇所を読みました。」

朱子「敬以て内を直くす」ることができたとしても、「義以て外を方にし」なければならぬ。是非を知る事ができて、はじめて「格物」もできるのだ。「義」によって「外を方にし」なければ、是非や好悪

を分別できず、物にも格することはできない。」

祖道「「敬」が立てば、「義」はその中にあるのではないのでしょうか。伊川が「これを中に弻みたして、これを外に彪あきらかにす」について言っているのも、このことでしょう。」

朱子「「敬」が立って「義」がそこにあつたとしても、着実に体認できてこそ分かるというものだ。いまある人たちは胸の中でははっきりと知っていて、言うことも至極穏当だが、実際に物事に対応する時になると、慌てふためき間違いだらけ、すべてが私意で、しかもその自覚すらない。聖人の所謂「敬」や「義」は、完全な天理なのであって、どうしてそこに私意があるうか。仏教や老荘の輩の方が、それぞれあのように門戸を立てて、こういったことをほぼ窺い知っているようだ。彼らが「敬」というとき、むしろたしかに「敬」ができてゐる。笠影の喩えもあるではないか。」

〔注〕

(1) この条とほぼ同様の記載が、黄卓の記録として卷一二〇・40条(二八九三頁)に見える。

(2) 伊川説 『遺書』卷一八・101条「敬只是持己之道、義便知有是有非。順理而行、是爲義也。若只守一箇敬、不知集義、却是都無事也」、他に卷一五・45条、同49条等参照。

(3) 敬以直内義以方外 『易』坤卦・文言伝「君子敬以直内、義以方外」。

(4) 弻諸中彪諸外 揚雄『法言』君子「或問、君子言則成文、動則成德、何以也。曰、以其弻中而彪外也。般之揮斤、羿之激矢、君子不言、言必有中也。不行、行必有稱也」。程頤がこの言葉を引きしている箇所は未詳。あるいは『遺書』卷一八・11条「問、人有專務以直内、不務方外、如何。曰、有諸中者、

必形諸外。惟恐不直内、内直則外必方」を指すか。

(5) 笠影之喻 卷一二・28条(二〇一頁)「昔林艾軒在臨安、曾見一僧與說話。此僧出入常頂一笠、眼視不會出笠影外。某所以常道、他下面有人、自家上面没人」。この最後の「某所以常道、他下面有人、自家上面没人」については、卷八・91条(二四一頁)「佛家一向撤去許多事、只理會自身己、其教雖不是、其意思却是要自理會。所以他那下常有人、自家這下自無人」参照。つまり、「笠影之喻」とは、自分たち儒家よりもむしろ仏教の僧侶たちの方が外界に振り回されず自身の心を專一にすることができていることをいうもの。

【一六・39】^(校1)

某嘗喜那鈍底人。他若是做得工夫透徹時、極好。却煩惱那敏底、只是略綽看過、不會深去思量。當下說、也理會得、只是無滋味、工夫不耐久。如莊仲便是如此。某嘗煩惱這樣底少間不濟事。敏底人、又却要^(校4)做那鈍底工夫、方得。^(校5)「以下訓備。」

〔校注〕

(校1) 楠本本は、本条を卷一一七(二六二頁)に収める。

(校2) 楠本本は、「只是」の前に「他」が入る。

(校3) 楠本本は、「無」を「无」に作る。

(校4) 楠本本・正中書局本・朝鮮整版は、「要」を「用」に作る。

(校5) 楠本本は、「以下訓備」の小字注を欠く。

〔訳〕

私は常々鈍重な人を好ましく思っている。そういう人が学問を徹底的になし遂げたときは、本当に素晴らしい。むしろ明敏な者には悩まされる。彼らはいい加減にざっと読み飛ばして、深く考えようとしめない。すぐに分かったと言うが、言うことにちつとも味わいが無く、根気よく努力することができない。莊仲（沈儻）などは、まさにそうだ。私は常々そういう者たちに頭を痛めている。そのうちすぐにどうにもならなくなるだろう。明敏な者は、むしろ鈍重な学問をしなければだめなのだ。

〔注〕

(1) 鈍底・敏底 例えば、卷一四・158条（二七八頁）「今人之學、却是敏底不如鈍底。鈍底循循而進、終有得處。敏底只是從頭呼揚將去、只務自家一時痛快、終不見實理」、卷一〇四・45条（二六二頁）「看來前輩以至敏之才而做至鈍底工夫、今人以至鈍之才而欲爲至敏底工夫、涉獵看過、所以不及古人也」などとある。

(2) 莊仲 沈儻、莊仲は字。『門人』一三三頁、『資料索引』六八四頁、『学案』卷六九。

(34) 39条担当 中嶋諒

問「尋常遇事時、也知此爲天理、彼爲人欲。及到做時、乃爲人欲引去、事已却悔、如何。」曰「此便是無克己工夫。這樣處、極要與他掃除打疊、方得。如一條大路、又有一條小路。明知合行大路、然小路面前有箇物引著、自家不知不覺行從小路去、及至前面荆棘蕪穢、又却生悔。此便是天理人欲交戰之機。須是遇事之時、便與克下、不得苟且放過。此須明理以先之、勇猛以行之。若是上智聖人底資質、不用著力、自然存天理而行、不流於人欲。若賢人資質次於聖人者、到遇事時固不會錯、只是先用分別教是而後行之。若是中人之資質、須大段著力、無一時一刻不照管克治、始得。曾子曰、仁以爲己任、不亦重乎。死而後已、不亦遠乎。又曰、戰戰兢兢、如臨深淵、如履薄冰。而今而後、吾知免夫、小子。直是恁地用功、方得。」

〔校注〕

- (校1) 楠本本は本条を卷一一七(一六一九頁上段から、乱丁により一六二〇頁上段に続く)に収める。
- (校2) 楠本本は「如」の前に「此是」が入る。
- (校3) 楠本本・正中書局本・朝鮮整版・和刻本は「掃」を「掃」に作る。
- (校4) 楠本本は「明」の前に「自我也」が入る。
- (校5) 楠本本・正中書局本・朝鮮整版・和刻本は「存」を「循」に作る。
- (校6) 楠本本は「人」の後に「之」が入る。

(校7) 楠本本は「到」の後に「得」が入る。

(校8) 楠本本・正中書局本・朝鮮整版は「質」の字を欠く。

(校9) 楠本本は「不亦」を「亦不」に作る。

〔訳〕

質問 「ふだん何事かに遭遇した時、これが天理あれが人欲ということに分かるのですが、実際に行動しようとする時、人欲に引きずられていってしまい、事が済んだ後で後悔してしまいます。どうしたらよいのでしょうか。」

朱子 「それは「克己」の修養が欠けているのだ。そういうところは、きれいさっぱり始末してしまわねばいけない。たとえば大通りと小さな脇道があつて、大通りを行くべきことは分かっていたはずが、脇道に何か気にかかるものがあつて、知らず知らずのうちに脇道に逸れて行ってしまい、気がつくとき雑草と棘の生い茂る荒れ野に出て、その時になって後悔する、といった具合だ。これこそが天理と人欲が交戦する瞬間なのだ。物事に遭遇した時には、ただちに（人欲に）克たねばならず、いい加減にやりすごしてはならない。先ずは理を明らかにし、そして勇敢に行動しなければならぬ。上智の聖人の資質であれば、努力をせずとも、自然に天理を保ちつつ行動し、人欲に流れることはない。聖人に次ぐ賢人の資質であれば、物事に遭遇した時にもちろん過つことはないが、それでも先ず分別して正してから行う。中人の資質であれば、大いに努力をし、いついかなる時も意識して人欲を克服し、自らをコントロールしなければならぬ。曾子は「仁以て己が任と為す。亦た重からずや。死して後已む、亦た遠からずや」と言っている。また「戦戦兢兢、深淵に

臨むが如し、薄氷を履むが如し。而今よりして後、吾免るることを知るかな、小子よ」とも言っている。本
当にこんなふう⁽⁴⁾に努力しなければならぬのだ。」

〔注〕

(1) 本条と卷一一九・24条(二八七五頁)は同一場面の別記録。

(2) 克己 『論語』顏淵「顏淵問仁。子曰、克己復禮爲仁。一日克己復禮、天下歸仁焉。爲仁由己而由
人乎哉。顏淵曰、請問其目。子曰、非禮勿視、非禮勿聽、非禮勿言、非禮勿動」。

(3) 上智 『論語』陽貨「子曰、唯上知與下愚不移」。

(4) 中人 『論語』雍也「子曰、中人以上可以語上也。中人以下不可以語上也」。

(5) 仁以爲己任く不亦遠乎 『論語』泰伯。

(6) 戰戰兢兢く吾知免夫、小子 『論語』泰伯。

〔校〕⁽¹⁾
【一一六・41】

問毎日做工夫處。曰「毎日做工夫、只是常常喚醒、如程子所謂主一之謂敬、謝氏所謂常惺惺法是也。然這
裏便有致知底工夫。程子曰、涵養須用敬、進學則在致知。須居敬以窮理。若不能敬、則講學又無安頓處。」

〔校注〕

(校1) 楠本本は本条を卷一一七(一六二〇頁)に収める。

(校2) 正中書局本は「做」字を欠く。

〔訳〕

日々の努力のしどころについて質問した。

朱子「日々の努力は、常に意識を呼び覚ますことに尽きる。程子のいう「主一を之れ敬と謂う」、謝氏(良佐)のいう「常惺惺法」というのがそうだ。そして、そこには「致知」の修養も含まれている。程子は「涵養は須く敬を用うべく、進学は則ち致知に在り」と言っている。「敬」の状態を保ちつつ、理を窮めなければならぬ。もし「敬」がでなければ、あれこれ議論をしても落ち着きどころがない。」

〔注〕

(1) 本条と卷一一九・22条(二八七五頁)はほぼ同じ内容の記録。

(2) 主一之謂敬 『遺書』卷一五・17条「大凡人心、不可二用、用於一事、則他事更不能入者、事爲之主也。事爲之主、尚無思慮紛擾之患、若主於敬、又焉有此患乎。所謂敬者、主一之謂敬。所謂一者、無適之謂一。且欲涵泳主一之義、一則無二三矣。一作不一則二三矣。」

(3) 常惺惺法 『上蔡語錄』卷中・36条「敬是常惺惺法」。

(4) 致知 『大学』(章句經一章)。

(5) 涵養須用敬、進學則在致知 『遺書』卷一八・28条。

【一六・42】^(校1)

問「色容⁽¹⁾莊、持久甚難。」曰「非用功於外也、心肅而容莊。」問「若非聖人説下許多道理、則此身四支耳目更無安頓處。」曰「然。古人固嘗言之、非禮則耳目手足無所措。」^(校2)^(校3)

〔校注〕

(校1) 楠本本は本条を卷一一七(一六二〇頁)に収める。

(校2) 楠本本は「固」を「因」に作る。

(校3) 楠本本は末尾に「以條卓同」の小字注が入る。

〔訳〕

質問「色容は莊(顔つきは厳かに)」と申しますが、これを持續するのは大変難しく感じます。」

朱子「外側に意を注ぐのではない。心が厳肅であれば、顔つきも厳かになるのだ。」

質問「聖人が多くの道理を示しておいて下さらなければ、この身の手足も耳目も落ち着きどころがなかったのですね。」

朱子「そのとおりだ。古人もかつて「礼に非ざれば則ち耳目手足措くところ無し」と言っている。」

〔注〕

(1) 色容莊 『礼記』玉藻「君子之容舒遲。見所尊者齊。足容重、手容恭、目容端、口容止、聲音靜、頭容直、氣容肅、立容德、色容莊、坐如尸」。卷一一四・7条(二七五四頁)「問、色容莊最難。曰、心肅則容莊、非是外面做那莊出來」。

(2) 非禮則耳目手足無所措 『礼記』仲尼燕居「若無禮則手足無所措、耳目無所加、進退揖讓無所制」。

〔校〕
【一六・43】

道理極是細膩。〔校2〕公們心都粗大、〔校3〕入那細底不得。

〔校注〕

(校1) 楠本本は本条を卷一一七(一六二〇頁)に収める。

(校2) 楠本本・正中書局本・和刻本は「們」を「門」に作る。

(校3) 楠本本・正中書局本・和刻本は「粗」を「麤」に、「麤」に、朝鮮整版は「麤」に作る。

〔訳〕

道理は極めて微細なものだ。君たちの心は大雑把で、その微細なところに入っていくことができない。

〔注〕

(1) 心都粗大 卷一二・54条(二三九頁)「惟心粗一事、學者之通病」、卷九・57条(二〇五頁)「心熟

後、自然有見理處。熟則心精微。不見理、只緣是心粗」。

【^(校1)一一六・44】

公而今只是說他人短長、都不自反己看。如公適問說學者來此不講誦、蚤來莫去、^(校2)是理會甚事。自初來至去、
是有何所得。聽得某說話、有何警發。每日靠甚麼做本、從那裏做去。公却會說得箇頭勢如此大。及至末梢、
又却只是檢點他人某事某事、^(校3)元未有緊要、那人亦如何服公說。且去理會自己身心、^(校4)煞有^(校4)事在。

〔校注〕

(校1) 楠本本は本条を卷一一七(一一六二二頁)に収める。

(校2) 朝鮮整版は「莫」を「暮」に作る。

(校3) 楠本本は「某事」を「云云」に作る。

(校4) 楠本本は末尾に「以上並欄自録」の小字注が入る。

〔訳〕

君はいま他人の短所長所を論じるばかりで、全く自分について反省してみるといふことをしていない。君はさつきこんなふう⁽¹⁾に言っていたね。「学ぶ者でありながらここに來て議論も講読もしないで、朝から晩まで、何をしているのか。ここへ來てから帰るまでに何を⁽²⁾得るといふのか。先生のお話を聴いてどのように啓

發されたのか。日々何を本としどこからやつていくのか。君はこんなふうに威勢よく言うことはできるが、いきつくところ、ただ他人のあれやこれやを点検しているに過ぎない。そんなことは元來喫緊のことではない。誰が君の言うことに動かされよう。先ずは自分自身のことに取り組むこと、そこに大いにやる必要があるはずだ。

【^(校1)一一六・45】

今公掀然有飛揚之心、以爲治國平天下如指諸掌。不知自家一箇身心都安頓未有下落、如何說功名事業。怎生治人。古時英雄豪傑不如此。張子房、不問著他不說。諸葛孔明甚麼樣端嚴。公浙中一般學、是學爲英雄之學、務爲跼弛豪縱、全不點檢身心。某這裏須是事事從心上理會起、舉止動步、事事有箇道理。一毫不然、便是欠闕了他道理。^(校2)固是天下事無不當理會、只是有先後緩急之序。須先立其本、方以次推及其餘。今公們學都倒了、緩其所急、先其所後、少間使得這身心飛揚悠遠、全無收拾處。而今人不知學底、他心雖放、然猶放得近。今公雖曰知爲學、然却放得遠。少間會失心去、不可不覺。

〔校注〕

(校1) 楠本本は本条を卷一一七(一六二〇頁)に収める。

(校2) 楠本本は「闕」を「開」に作る。

(校3) 楠本本・正中書局本・和刻本は「們」を「門」に作る。

〔訳〕

いま君はむやみに張り切つて心をあらぬ方へ飛翔させて、国を治め、天下を平らかにすることなど掌を指さすように容易いことだと思つていようだが、自分一個の身心すら安定した落ち着きどころがなくて、どうして功名や事業のことを口にしたたり、人を治めることができようか。いにしえの英雄豪傑はそんなふうではなかつた。張子房(良)は問われなければ語らず、諸葛孔明(亮)はなんと謹嚴だったことか。君たち浙中の学問は、英雄となることを学ぼうとする学問だ。つとめて豪放不羈であろうとして、全く自身の身心を点検しない。私のところでは、あらゆる物事について心の面から取り組み始めなければならぬ。挙措動作、ひとつひとつの事には道理があるのだ。わずかでもそれに反すれば、すぐにその道理を欠いてしまうことになる。もとより天下に、取り組まなくてもよい事などない。ただそこには先後緩急の順序というものがある。先ず根本を立てて、そこではじめてその他に推し及ぼしてゆけるのだ。いま諸君の学問はまったく順序が逆さまになつてしまつてゐる。急であるべきところを緩め、後にすべきところを先にしてしまい、そのうち自身の身心を遙か遠くへ飛翔させ、まったく收拾がつかなくさせてしまつてゐる。近頃の学問を知らない人は、心をどこかへ放つてしまつてゐるとはいえ、せいぜい近くに放つてゐるだけだ。いま君は学問をすることを知つてゐるとはいふけれども、むしろ遠くに放つてしまつてゐる。そうこうしてゐるうちに心を見失つてしまふだろう。気をつけなければならぬ。

〔注〕

(1) 張子房 張良、漢の高祖の參謀。朱熹はしばしば張良を「老子」あるいは「黃老」になぞらえて論評している。卷一三五・17条(三二二頁)以下参照。また、北宋の邵雍が張良を好んだことに因んで、両者を結びつけて論じている。卷一〇〇・10条(二五四頁)以下参照。本条のように、張良と諸葛亮を並べて論評を加えている箇所も多く見える。注(2) 所引参照。

(2) 諸葛孔明 朱熹の孔明評価については、卷一三六・5条(三三三頁)以下を参照。「諸葛孔明大綱資質好、但病於祖疎。孟子以後人物、只有子房與孔明」、6条「但孔明本不知學、全是駁雜了。然却有儒者氣象、後世誠無他比」。

(40) 45条担当 阿部 亘

【一六・46】^(校1)

讀書之法、既先識得他外面一箇皮殼了、又須識得他裏面骨髓方好。如公看詩、只是識得箇模像如此、他裏面好處、全不見得。自家此心都不會與他相黏、所以^(校3) 無汁漿。如人開溝而無水、如此讀得何益。未論^(校5) 讀古人書、且如一近世名公詩、也須知得他好處在那裏。如何知得他好處。亦須吟哦諷詠而後得之。今人都不曾識。好處也不識、^(校6) 不好處也不識。不好處以爲好者有之矣、好者亦未必以爲好也。其有知得某人詩好、某人詩不好者、亦只是見已前人如此說、便承虛接響說取去。如矮子看戲相似、^(校8) 見人道好、他也道好。及至問着他那裏是好處。元不曾識。舉世皆然、只是不曾讀。熟讀後自然見得。人而不爲周南召南、其猶正牆面而立也與。^(校10)

今公讀二南了、還能不正牆面而立否。意思都不曾相黏、濟得甚事。前日所舉韓退之⁽²⁾蘇明允二公論文處、他都是下這般工夫、實見得那好處、方做出這般文章。他都是將三代以前文字熟讀後、故能如此。如向者呂子約書來、說近來看詩甚有味、錄得一冊來、盡是寫他讀詩有得處。及觀之、盡是說詩序。如關雎只是說一箇后妃之德也、葛覃只是說得箇后妃之本與化天下以婦道也。自關關雎鳩、葛之覃兮已下、更不說著。如此讀詩、是讀箇甚麼。呂伯恭大事記亦是如此、盡是編排詩序書序在上面。他們讀書、盡是如此草草。以言事、則不實。以立辭、則害意。

〔校注〕

(校1) 楠本本は本条を卷一一七(一六二頁)に収める。

(校2) 楠本本、正中書局本、朝鮮整版は「像」を「象」に作る。

(校3) 楠本本は「汁漿」を「味」に作る。

(校4) 楠本本は「如」を「譬如」に作る。

(校5) 楠本本、正中書局本、朝鮮整版は「一」を「讀」に作る。和刻本は「一」字を欠く。

(校6) 楠本本は「不好處也不識」の一句を欠く。

(校7) 楠本本は「好」を「不好」に作る。

(校8) 楠本本は「見」を「他見」に作る。

(校9) 楠本本は「道」を「説」に作る。

(校10) 楠本本は「元」を「他元」に作る。

(校11) 楠本本、正中書局本、朝鮮整版、和刻本は「與」を「歟」に作る。

(校12) 楠本本は「們」を「門」に作る。

〔訳〕

読書の仕方は、まず外側の皮や殻を理解し、さらにその内の真髓を理解するようにならなければいけない。君の『詩』の読み方は、ただぼんやりとしたイメージを捉えているだけで、その内の良い所を全く読み取れていない。自分の心がその詩とぴったりと一つになっていないから、無味乾燥で、潤いがないのだ。まるで溝を開いてもそこに水が無いようなもの、そんな読み方をして何の益があるうか。古人の書は言うに及ばず、たとえば近世の名のある人物の詩にしても、その良さがどこにあるかを理解しなければならぬ。どうすればその良さが理解できるかといえ、やはりその詩を声に出し節をつけて詠^{うた}ってみてこそ分かるのだ。ところが、今の人たちがきたら、まったく何も分かっていない。良い所も知らなければ、良くない所を良いとする者もあり、また良い所についても必ずしも良いとしないという始末だ。誰某の詩は良く、誰某の詩は良くないなどと言っている者たちも、ただ以前に誰かがそう言っていたのをうけ売りで繰り返しているに過ぎない。まるで小人^{こびと}の芝居見物、(自分は見えないので)人が良いと言え、自分も真似をして良いと言うようなものだ。いったいどこが良いのかと問うてみても、元来分かっていないのだ。世を挙げてこの有り様、とにかくきちんと読んでいないということだ。熟読すれば必ずと理解できるといふのに。(『論語』に)「人にして周南召南を為^{おさ}めずんば、其れ猶ほ正しく牆^{かき}に面して立つがごときか」というが、君は実際にこの二篇

を読み終えて、牆を真ん前にして立つ（前を遮られ何も見えず、進めないという）ようなことはなくなつたのだろうか。（君の心とその詩が）ぴったりと一つになるのでなければ、何になるうか。先日話題にした韓退之（愈）・蘇明允（洵）の二人の作文論は、いずれも二人がそういう修養をし、その書の良い所を實際に体験した上ではじめて書き得た文章なのだ。二人とも三代以前の文章を熟読したからこそ、あのようになれたのだ。先日、呂子約（祖儉）から手紙が届き、最近『詩』を読むとなんと味わい深いといって、抄録を一冊送ってくれたが、それはすべて彼が『詩経』を読んで得た事を綴つたものであった。読んでみると、なんとすべて「詩序」を論じたものばかりであった。たとえば、「閑雅」の詩についてはただ「后妃の徳なり」、「葛覃」の詩についてはただ「后妃の本」「天下を化するに婦道を以てするなり」と詩序の言葉を述べるだけで、「閑閑たる雉鳩」や「葛の覃びるや」といった詩序以下の経文は論じてすらいらない。こんなふうには『詩』を読んで、いったい何を讀んだというのか。呂伯恭（祖謙）の『大事記』も同じような有り様で、「詩序」「書序」を上になべたに過ぎない。彼らの読書は、まったくこのように杜撰なもの、事を言えば実でなく、辞を立てれば意を害さなうといった具合だ。

〔注〕

（1）人而不爲周南召南、其猶正牆面而立也與 『論語』陽貨「子謂伯魚曰、女爲周南召南矣乎、人而不爲周南召南、其猶正牆面而立也與」。「周南」「召南」は『詩経』の篇名。

（2）韓退之蘇明允二公論作文處 卷三一・33条（七八八頁）「韓退之蘇明允作文、只是學古人聲響、盡一生死力爲之、必成而後止。今之學者爲學、曾有似他下工夫到豁然貫通處否」。

(3) 呂子約 呂祖儉(？一八九八)。字は子約、大愚と号す。呂祖謙の弟。

(4) 詩序 朱熹は「詩序」を否定している。卷八〇参照。

(5) 呂伯恭大事紀 呂祖謙の編んだ『大事紀』に対して、朱熹は否定的であった。卷一〇五・53条(二六三六頁)「伯恭大事紀忒藏頭兀腦、如搏謎相似。又解題之類亦不多」。「詩序」「書序」に関しては、『大事紀通釈』に見える。

【一六・47】

問「鳶飛魚躍、南軒云鳶飛魚躍、天地之中庸也。」曰「只看公如此說、便是不會理會得了。莫依傍他底說。只問取自家是真實見得不會。自家信、是信得箇甚麼。這箇道理、精粗小大、上下四方、一齊要著到、四邊合圍起理會。莫令有些子走透。」^(校2)少間方從一邊理會得、些小有箇見處、有箇入頭處。若只靠一邊去理會、少間便偏枯了、尋捉那物事不得。若是如此悠悠、只從一路去攻擊他、而又不曾著力、何益於事。」李敬子曰「覺得已前都是如此悠悠過了。」曰「既知得悠悠、何不便莫要悠悠。便是覺意思都不會痛切。每日看文字、只是輕輕地拂過、寸進尺退、都不會依傍築磕著那物事來。此間說時、^(校3)旋扭湊合、說得些小、才過了、又便忘了。或他日被人間起、又遂旋扭說得些小、過了又忘記了。如此濟得甚事。早間說如負痛相似。」^(校4)因言「持敬、如書所云若有疾。如此方謂之持敬。如人負一箇大痛、念念在此、日夜求所以去之之術。理會這一件物、須是徹頭徹尾。全文記得、始是如此、末是如此、中間是如此、如此謂之是、如此謂之非。須是理會教透徹、無些子疑滯、^(校5)

方得。若只是如此輕輕拂過、是濟甚事。^(校5)如兩軍廝殺、兩邊播起鼓了、只得拌命進前、有死無二、方有箇生路、^(校12)更不容放慢。若纔攻慢、^(校13)便被^(校14)他殺了。」

〔校注〕

(校1) 楠本本は本条を卷一一七(一六二〇頁)に収める。

(校2) 楠本本・正中書局本・朝鮮整版は「子」を「小」に作る。

(校3) 朝鮮整版は「少」を「小」に作る。

(校4) 楠本本は「一」を「四」に作る。

(校5) 楠本本・正中書局本は「覺」を「覺得」に作る。

(校6) 楠本本・正中書局本・和刻本は「扭掙」を「紐捏」に、朝鮮整版は「紐捏」に作る。

(校7) 楠本本・正中書局本・朝鮮整版・和刻本は「因言持敬、如書所云若有疾、如此方謂之持敬。」を小字注とする。

(校8) 和刻本は「大」を「太」に作る。

(校9) 和刻本は「末」を「未」に作る。

(校10) 楠本本は「疑」を「凝」に作る。

(校11) 楠本本は「廝殺、兩邊」を欠く。

(校12) 楠本本・正中書局本・朝鮮整版・和刻本は「拌」を「拚」に作る。

(校13) 楠本本・正中書局本・朝鮮整版は「纒攻」を「才放」に、和刻本は「纒放」に作る。

(校14) 楠本本は「了」を欠く。

〔訳〕

質問「『詩経』の「鳶飛び（て天に戻り）、魚（淵に）躍る」について、南軒（張栻）は「鳶飛魚躍は天地の中庸である」と述べております。」

朱子「いま君のその言い方を聞くだけで、何も理解していないことが分かる。他人の説に寄りかかってはだめだ。自分が本当に分かっているのかどうか問題なのだ。自分が信じているというのは、何を信じているのか。道理というものは、精粗小大、上下四方、（最終的には）すべてが一斉に窮め尽くされるもので、四方から隙間無く困むようにして取り組み、少しも漏らす所があつてはならないのだ。そのうちようやくある方面から理解できるようになり、わずかながらも分かるところができ、手がかりがつかめるだろう。もし一方向に固執して理解しようとするばかりでは、そのうち凝り固まってしまい、そのもの全体は捉えられない。ましてそんなふう悠長に構え、一方向から攻めることにすら力を尽くさないようであれば、何にもなりはしない。」

李敬子（燾）「たしかに以前は、いつもそのように悠長に過しておりました。」

朱子「気づいているのなら、どうしてすぐに悠長にしないようにしないのだ。まったく切実さが欠けている。毎日読書をしていても、単に軽く表面をなぞるだけで、一寸進めば一尺後退というふうにくぐくぐしているだけ、書物にしがみついてがむしやらに取り組むというところがまったく無い。この間も、その場しの

ぎであれこれこじついたり（人の説を）寄せ集めたりしてわずかばかり何か言っていたが、それも過ぎてしまえばすぐに忘れてしまったのだろう。他日人から質問されると、またまたその場しのぎのこじつけでわずかに何か言っていたが、過ぎてしまえばそれも又忘れてしまったのだろう。そんなふうでいったい何ができるといふのか。痛みがあるがごとく（切実）に、と言ったはずだ。」

そこで言われた。

朱子「敬」を保持する修養は、『書経』に「疾有るが若し」とあるように行なつてこそ、「持敬」と言えるのだ。たとえば人に激痛がある時、その人は常にその痛みのことだけを考え、日夜その痛みを取り除く方法を求めるだろう。あることを理解しようすれば、最初から最後まで、全文を覚え込み、始めはこうで、終わりもこう、途中はこうであり、こういうのを是といい、こういうのを非という、というように徹底してやらなければならない。理解が透徹し、わずかな疑念やひっかかりも残らないようにならなければだめだ。そんなふうになんか軽く表面をなぞるだけで、いったい何ができるといふのか。たとえば軍隊同士が殺し合っている時、双方が鼓を打ち鳴らせば、兵士たちは命がけで前進するしかない。死ぬしかないと思つた時にはじめて活路も見出せるのであつて、ぼんやり漫然としてゐることは許されない。もしわずかでも気を緩めれば、すぐに相手に殺されてしまふだろう。」

[注]

(1) 鳶飛魚躍 『詩経』大雅・旱麓「鳶飛戾天、魚躍于淵」。『中庸』（章句十二章）「詩云、鳶飛戾天、

魚躍于淵。言其上下察也」。

(2) 築碁著 あつちになぶつかりこつちにぶつかりながら、よろよろ進むこと。あくせく奔走すること。

『語類』では本条にのみ見えるが、類いの「築著碁著」「築著」といった表現も見える。卷七〇・129条

(一七六三頁)「有命、是有箇機會、方可以做。占者便須是有箇築著碁著時節、方做得事成、方无咎」。

(3) 早間説如負痛 学問修養の切実さを痛みに喩える発言は多い。卷一一・96条(一八九頁)「若是經

書有疑、這箇是切己病痛。如人負痛在身、欲斯須忘去而不可得」、卷一一・111条(二九四八頁)「先

生一日腰疼甚、時作呻吟聲。忽曰、人之爲學、如某腰疼、方是」、112条「因説工夫不可間斷、曰、某若

臂痛、常以手擦之、其痛遂止。若或時擦、或時不擦、無緣見效、即此便是做工夫之法。正叔退、謂文蔚

曰、擦臂之喩、最有味」。

(4) 書所云若有疾 『書經』大誥「天亦惟用勤毖我民、若有疾」。

(5) 如兩軍廝殺く便被他殺了 この喩えは卷一一・12条(二九二二頁)にも見える。「學者悠悠是大

病。今覺諸公都是進寸退尺、每日理會些小文義、都輕輕地拂過、不會動得皮毛上。這箇道理規模大、體

面闊、須是四面去包括、方無走處。……如見陳廝殺、播著鼓、只是向前去、有死無二、莫更回頭始得」。

(46く47条担当 江波戸 互)

【^(校)一一六・48】

友仁⁽¹⁾初參拜畢、出疑問一冊、皆大學語孟中庸平日所疑者。先生略顧之、謂友仁曰「公今須是逐一些子細理

會、始得、不可如此鹵莽。公之意、自道此是不曉者、故問。然其他不問者、恐亦未必是。豈能便與聖賢之意合。須是理會得底也來整理過、方可。」「以下訓友仁。」

〔校注〕

(校1) 楠本本は本条を卷一一七(一六二二頁)に収める。

(校2) 楠本本は「不曉」を「不可曉」に作る。

〔訳〕

(郭) 友仁は初めて参上し挨拶を終えると、質問を記した一冊をお見せした。すべて『大学』『論語』『孟子』『中庸』について日頃から疑問に思っているところであった。先生はざつと目を通しておっしゃった。

朱子「君はこれからは一つずつ細かく理解するように取り組まなければならない。こんなふうがいい加減ではないからね。君としては分からないと思うから質問をしているのだろうが、(分かっているつもりで)質問していない他のところだつて、恐らくは必ずしも正しいとは限るまい。(君の理解が)どうしてそんなに簡単に聖賢の意と合致することができようか。理解できたと思つているものにも取り組まなければいけないよ。」

〔以下、郭友仁への訓戒。〕

〔注〕

(1) 友仁 郭友仁、字徳元。『門人』二〇三頁、『資料索引』一四〇五頁、『学案』卷六九。

問邦畿千里惟民所止。曰「此是大率言物各有所止之處。且如公、其心雖止得是、其迹則未⁽²⁾在。心迹須令爲一、方可。豈有學聖人之道、服非法之服、享非禮之祀者。程先生謂文中子言心迹之判、便是亂說者、此也。」友仁曰「舍此則無資身之策。」曰「君子謀道不謀食、豈有爲人而憂此者。」

〔校注〕

(校1) 楠本本は本条を卷一一七(一六二三頁)に収める。

(校2) 楠本本は「曰」を「先生曰」に作る。

〔訳〕

「邦畿千里、惟れ民の止まる所」について質問した。

朱子「これは、おおよそ物にはそれぞれ止まる処があることをいっているのだ。たとえば君の場合、その心は止まるべきところに止まり得たとしても、その迹である言動はまだまだという状況だね。心と迹とを一致させなければいけないのだ。どうして聖人の道を学んでいて、規範に合わない服を着たり、禮に適わない祭祀を行ったりすることがあるうか。「文中子(王通)の心と迹の分け方はでたらめだ」と程先生がおっしゃったのは、このことだ。」

友仁「これをおいては身を立てる術がないということですね。」

朱子「君子は道を謀りて食を謀らず」だ。人としてそんなことを心配する者があるうか。」

〔注〕

(1) 邦畿千里惟民所止 『詩経』商頌・玄鳥「邦畿千里、維民所止、肇域彼四海、四海來假」。本条ではこれを踏まえた『大学』（章句伝三章）「詩云、邦畿千里惟民所止」についての質問。

(2) 服非法之服、享非禮之祀 『孝経』卿大夫章「非先王之法服、不敢服」。『論語』為政「非其鬼而祭之、諂也」。

(3) 程先生謂く便是亂說者 『遺書』卷一五・97条「釋氏之說、若欲窮其說而去取之、則其說未能窮、固已化而爲佛矣。只且於迹上考之。其設教如是、則其心果如何。固難爲取其心不取其迹、有是心則有是迹。王通言心迹之判、便是亂說、不若且如迹上斷定不與聖人合。其言有合處、則吾道固已有。有不合者、固所不取。如是立定、却省易」。

(4) 文中子言心迹之判 王通『中說』問易篇「魏徵曰、聖人有憂乎。子曰、天下皆憂、吾獨得不憂乎。問疑。子曰、天下皆疑、吾獨得不疑乎。徵退。子謂董常曰、樂天知命、吾何憂。窮理盡性、吾何疑。常曰、非告徵也。子亦二言乎。子曰、徵所問者、迹也。吾告汝者、心也。心迹之判久矣、吾獨得不二言乎。常曰、心迹固殊乎。子曰、自汝觀之則殊也。而適造者不知其殊也。各云當而已矣。則夫二未違也……」。

(5) 君子謀道不謀食 『論語』衛靈公「子曰、君子謀道不謀食。耕也餒在其中矣。學也祿在其中矣。君子憂道不憂貧」。

先生曰「公向道甚切、也曾學禪來。」曰「非惟學禪、如老莊及釋氏教典、亦曾涉獵。自說法華經至要處乃是在法非思量分別之所能解一句。」先生曰「我這裏正要思量分別。能思量分別、方有豁然貫通之理。如公之學也不易。」因以手指書院曰「如此屋相似、只中間潔淨、四邊也未在。未能博學、便要約禮。窮理處不曾用工、守約處豈免有差。若差之毫忽、便有不可勝言之弊。」又顧同舍曰「德元却於此理見得彷彿、惜乎不曾多讀得書。」却謂友仁曰「更須痛下工夫讀書始得。公今所看大學或問格物致知傳、程子所說許多說話、都一一記得、方有可思索玩味。」

〔校注〕

(校1) 楠本本は本条を卷一一七(一六二二頁)に収める。

(校2) 楠本本は「典」を「與」に作る。

(校3) 楠本本は「裏」を欠く。

(校4) 正中書局本は「毫」を「豪」に作る。

〔訳〕

朱子「君(友仁)は求道心が強いが、やはり以前に禪を学んだのかね。」

友仁「禅だけではありません。老荘や釈氏の経典なども涉獵してきました。私は『法華経』の最重要ポイ

ントは「この法は思量分別の能く解する所に非ず」の一句にあると思います。」

朱子「私のところでは、まさにその思量分別をもとめるのだがね。思量分別ができてこそ「豁然貫通」の道理があるのだ。君のような学び方もなかなか簡単ではないがね。」

先生はそこで手で書院を指しておっしゃった。

朱子「ちようどこの部屋と同じようなもので、真ん中は綺麗にしてあるが、四隅はまだまだという状態だ。」

「博学」ができていないのに、いきなり「約礼（礼で集約する）」を求めるようなもの、「窮理」に努めなければ、「守約（身の行いの守り方がシンプルで要を得ている）」において、どうして間違いを免れることができない。もしほんの少しでも間違えば、数え切れないほどの弊害が出てくる。」

さらに書院の同部屋の人におっしゃった。

朱子「徳元（友仁）は道理というものをぼんやりとは分かっているけれども、惜しいことにこれまであまり本が読めていなかった。」

そこで友仁わたしにこうおっしゃった。

朱子「もつと必死に努力して読書をしないといけない。君が今読んでいる『大学或問』の格物致知伝や程子の多くの言葉は、一つ一つすべて暗記してこそ、はじめて思索玩味ができるようになるのだ。」

〔注〕

（1）是法非思量分別之所能解 『妙法蓮華經』卷一・方便品第二（大正九・7a）。

（2）豁然貫通 『大学』（章句・格物致知補伝）「所謂致知在格物者、言欲致吾之知、在即物而窮其理

也。蓋人心之靈莫不有知，而天下之物莫不有理，惟於理有未窮，故其知有不盡也。是以大學始教，必使學者即凡天下之物，莫不因其已知之理而益窮之，以求至乎其極。至於用力之久，而一旦豁然貫通焉，則衆物之表裏精粗無不到，而吾心之全體大用無不明矣。此謂物格，此謂知之至也。

(3) 未能博學，便要約禮 『論語』雍也及公顏淵「子曰：君子博學於文，約之以禮，亦可以弗畔矣夫。」「夫子循循然善誘人，博我以文，約我以禮」。卷三三・35條（八三六頁）「博學是致知，約禮則非徒知而已，乃是踐履之實」，同22條（八三三頁）に「博文所以驗諸事，約禮所以體諸身」。

(4) 守約 『孟子』尽心下「言近而指遠者，善言也。守約而施博者，善道也」。

【一六・51】^(校1)

張問「先生論語或問甚好，何故不肯刊行。」^(校2)曰「便是不必如此。文字儘多，學者愈不將做事了，只看得集注儘得。公還盡記得集注說話否。非唯集注，恐正文亦記不全，此皆是不曾仔細用工夫。且如邵康節始學於百原，^(校3)堅苦刻厲，冬不爐，夏不扇，夜不就席者有年，公們曾如此否。論語且莫說別處，只如說仁處，這裏是如此說，那裏是如此說，還會合得否。」友仁曰「先生有一處解仁字甚曉然，言仁者，^(校4)人心之全德，必欲以身體而力行之，可謂重矣。一息尚存，此志不容少懈，可謂遠矣。」先生不應。次日，却問「公昨夜所舉解仁說在何處。」曰「在曾子言仁以爲己任章。」^(校5)先生曰「德元看文字，却能記其緊要處。有萬千人看文字者，却不能於緊要處理會，只於瑣細處用工。前日他問中庸或問不一其內，無以制其外，不齊其外，無以養其中，靜而不存，^(校6)

無以立其本、動而不察、無以勝其私。此皆是切要處。學者若能於切要處做工夫、又於細微處不遺闕了、久之自然有得。」

〔校注〕

(校1) 楠本本は本条を卷一一七(一六二二頁)に収める。

(校2) 楠本本は「曰」を「先生曰」に作る。

(校3) 楠本本・朝鮮整版・正中書局本は「仔」を「子」に作る。

(校4) 楠本本・正中書局本は「們」を「門」に作る。

(校5) 楠本本は「所舉」を「舉所」に作る。

(校6) 楠本本は「曰」の前に「友仁」が入る。

(校7) 楠本本は「曾子」の前に「秦伯篇」が入る。

〔訳〕

張某「先生の『論語或問』は非常によいものですのに、どうして刊行しないのですか。」

朱子「そんな必要はないのだよ。書物が多くなればなるほど、学ぶ者はますます真剣に取り組まなくなってしまう。『集注』を読むだけで十分だ。では聞くが、君は『集注』の説を全部覚えていられるのかね。『集注』どころか、おそらく経の本文すら覚えきっていないのだろう。それはすべて細かく一つ一つ学問をしてこなかったということだ。たとえば邵康節(雍)は「百原で学問を始めた時、堅苦刻厲、冬でも爐を用いず、夏

でも扇を使わず、夜は寢床に入ることなく何年も学問した」ということだが、君たちは今までそんなふうな学問に取り組んできたかね。『論語』にしたつて別の箇所はしばらく置いておくとしても、たとえば「仁」を語ったところなど、こつちではこう言い、あつちではああ言っているのを、つき合わせて理解することができているのかね。」

友仁「先生が「仁」の字を非常に明確に解釈された箇所があります。即ち「仁は、人心の全徳、必ず身を以て体して之を力行せんと欲す、「重し」と謂ふべし。一息も尚ほ存すれば、この志少しも懈るべからず、「遠し」と謂ふべし」です。」

先生は黙ってお答えにならなかつた。次の日、先生の方から友仁わたしにお訊ねになった。

朱子「君が昨夜挙げた仁の解釈はどこに載っているのかね。」

友仁「曾子が「仁以て己が任と為す」と述べる章にあります。」

朱子「徳元（友仁）は書物を読んで、意外と緊要のところをよく覚えていた。書物を読む者は何千何万と多くいるが、みな緊要のところを理解できず、瑣末なところに力を費やしてしまう。先日、徳元が『中庸或問』の「其の内を一にせざれば、以て其の外を制すること無く、其の外を齊へざれば、以て其の中を養ふこと無く、静にして存せざれば、以て其の本を立つること無く、動にして察せざれば、以て其の私に勝つこと無し」について質問したが、これはすべて肝心かなめのところだ。学ぶ者が肝心かなめのところに取り組み、更に微細なところも漏らすことがなくなれば、いつかおのずと得られるものがあるだろう。」

〔注〕

- (1) 張 未詳。張洽(字元徳)か。『文集』卷六二「答張元徳」第七書に「語孟或問乃丁酉(一一七七)本。不知後來改定如何」という張元徳の問いに朱子が答えており、書簡の年代は陳來氏の考証によると慶元三年(一一九七)である。本条に登場する郭友仁は『語録姓氏』によると「戊午(一一九八)所聞」となっている。このため、時期的には合致する。ただその問いに対する朱子の回答内容に相違があり、確定できない。張洽、字元徳。『門人』一九二頁、『資料索引』二二五頁、『学案』卷四九、卷六九。また張姓の別の弟子として、卷一〇五・34条(二六三〇頁)に「張仁叟問論語或問」という一条もある。
- (2) 始學於百原、堅苦刻厲、冬不爐、夏不扇、夜不就席者有年 『河南程氏文集』卷四・明道先生文四「邵堯夫先生墓誌銘」に「先生始學於伯原、堅苦刻厲、冬不爐、夏不扇、夜不就席者數年、衛人賢之」とある。

(3) 百原 百原は地名で「百源」のこと。現在の河南省輝縣蘇門山にある。『宋元学案』は邵雍の学を「百源学案」として収録している(卷九・一〇)。

(4) 仁者く可謂遠矣 『論語集注』泰伯「曾子曰、士不可以不弘毅、任重而道遠。仁以爲己任、不亦重乎。死而後已、不亦遠乎」についての朱熹の注。

(5) 曾子言仁以爲己任 注(4)参照

(6) 不一其内く無以勝其私 『中庸或問』二〇章「不一其内、則無以制其外。不齊其外、則無以養其内。靜而不存、則無以立其本。動而不察、則無以勝其私」。

〔校〕
【一一六・52】

拜辭、先生曰「公識性明、精力短、每日文字不可多看。又記性鈍、但用工不輟、自有長進矣。」〔校〕

〔校注〕

〔校1〕 楠本本は本条を卷一一七（一六二三頁）に収める。

〔校2〕 楠本本は末尾に「以上友仁自録下見諸録。」の小字注が入る。

〔訳〕

暇乞いの折、先生がおっしゃった。

朱子「君は理解力はすぐれているが、根気がない。毎日の読書は多く読んではいけない。また、記憶力は悪いが、努力を途切れさせないようにすれば、おのずと進歩するだろう。」

〔校〕
【一一六・53】

因誨郭兄云「讀書者當將此身葬在此書中、行住坐臥、念念在此、誓以必曉徹爲期。看外面有甚事、我也不管、只恁一心在書上、方謂之善讀書。若但欲來人面前說得去、不求自熟、如此濟得甚事。須是著起精神、字

字與他看過。不惟念得正文注字、要自家暗地以俗語解得、方是。如今自家精神都不曾與書相入、念本文注字猶記不得、如何曉得。」〔卓。個同。〕

〔校注〕

（校1）楠本本は本条を卷一一七（一六二三頁）に収める。

（校2）楠本本は末尾に「個同」の小字注を欠く。

〔訳〕

そこで、郭兄（友仁）を諭しておっしゃった。

朱子「読書というものはこの身を書物の中に没入し、行住坐臥すべてにおいて、常にそのことを思いつづけ、徹底して理解するまでは止めないという覚悟が必要だ。外でどんなことが起ころうと、自分には関係のないこと、ひたすら書物に専心していてこそ、よい読書と言えるのだ。もしただ人前でそれなりに説明できることを求めるばかりで、自らのうちに熟することを求めないようであれば、何にもなりはしない。精神を奮い立たせて、一語一語、じっくりと読んでいかねばならない。本文や注釈を読むだけでなく、自分のなかでひそかに日常の言葉に置き換えて理解するようにするのがよい。いま、自分の気持ちがあつたく書物のなかに入っていかず、本文や注釈を読誦しても暗記できないようでは、どうして理解することができようか。」

〔注〕

〔記録者 黄卓。沈憫の記録も同じ。〕

(1) 看　くであらうと。く(1)に拘わりなく。田中謙二『朱子語類外任編詠注』(汲古書院)一〇八頁に、卷一〇六・27条(二六四七頁)「如一箇印刊得不端正、看印在甚麼所在、千箇萬箇都喞斜。不知人心如何恁地暗昧」の語釈として「看：甚麼…」という項目を設け、『語類』に独特の用法、「看」の下文に疑問形式が来れば、「儘管」または「不管」の意。下文にも「看是：如何…」「看有多少…」が見える。」と解説している。

【一六・54】

「讀書、須立下硬寨、定要通得這一書、方看第二書(校2)。若此書既曉未得、我寧死也不看那箇。如此立志、方成工夫。」郭德元言(校3)「記書不得。」曰「公不可欲速、且讀一小段。若今日讀不得、明日又讀。明日讀不得、後日又讀、須被自家讀得(校2)。若只記得字義訓釋、或其中有一兩字漏落、便是那腔子不會填得滿、如一箇物事欠了尖角處相似。少間(校4)自家做出文字、便也有所欠缺(校5)、不成文理。嘗見蕃人及武臣文字、常不成文理、便是如此。他心中也知得要如此說、只是字義有所欠缺(校6)、下得不是。這箇便是不得於言、勿求於心之患。是他心有所蔽、故如此。司馬遷史記用字也有下得不是處。賈誼亦然。如治安策說教太子處云、太子少長知妃色、則入于學(校7)。這下面承接、便用解說此義、忽然掉了、却說上學去云、學者所學之官也。又說帝入東學、上親而貴仁一段了、却方說上太子事、云及太子既冠成人、免於保傅之嚴云云、都不成文義、更無段落。他只是乘才快、胡亂寫去、這般文字也不可學(校8)。董仲舒文字却平正、只是又困。董仲舒匡衡劉向諸人文字、皆善弱無氣燄(校9)。司馬遷賈生(校10)、董仲舒匡衡劉向諸人文字、皆善弱無氣燄(校11)。司馬遷賈生(校7)

文字雄豪可愛、只是逞快、下字時有不穩處、段落不分明。匡衡文字却細密。他看得經書極子細、能向裏做工夫、只是做人不好、無氣節。^(校7)仲舒讀書不如衡子細、^(校12)疏略甚多。然其人純正開闊、衡不及也。」又曰「荀子云、誦數以^(校11)貫之、思索以通之。誦數、即今人讀書記徧數也、古人讀書亦如此。只是荀卿做得那文字不帖律處也多。」^(校14)「侗。」

〔校注〕

(校1) 楠本本は本条冒頭から「記書不得」までを一条として卷一一七(一六二三頁)に収め、「曰、公不可欲速」から末尾までを別の条(一六一八〜九頁)に収める。

(校2) 和刻本は「第」を「弟」に作る。

(校3) 正中書局本は「元」を「此」に作る。

(校4) 楠本本は「問」を「明」に作る。

(校5) 楠本本・正中書局本・朝鮮整版は「缺」を「闕」に作る。

(校6) 楠本本は「是」の前に「被」が入る。

(校7) 楠本本は「無」を「无」に作る。

(校8) 楠本本は「學」の前に「以」が入る。

(校9) 楠本本・正中書局本は「董」を「善」に作る。

(校10) 楠本本・正中書局本・和刻本は「匡」を「康」に作る。中華書局本は「據院本改。下同」と注釈をつける。なお、『考文解義』に「匡、一誤康。○按、匡、宋人諱太祖名作康。如匡俗爲康俗、是也。不

可謂之娛也。匡俗、周人隱廬山。故廬山亦号匡廬云」とある。

(校11) 楠本本は「皆」の前に「則」が入る。

(校12) 正中書局本・朝鮮整版・和刻本は「疏」を「疎」に作る。

(校13) 楠本本は「誦數以貫之、思索以通之」の字を欠く。

(校14) 楠本本は「憫」の前に「以下訓」が入る。

〔訳〕

朱子「読書は、堅固な意志を打ち立て、必ずこの一書に通暁してはじめて次の書物を読むようにしなければいけない。最初の書物が理解できないうちは、死んでも次の書物は読まないというように。このように志を立ててこそ、はじめて学問となるのだ。」

郭徳元（友仁）「書物を暗記することができません。」

朱子「君は速く読もうとしてはいけない。先ずは短い段落を読みなさい。もし今日読めなければ、明日もまた読み、明日読めなければ、後日また読み、すっかり自分のものになるように読まなければいけない。もし字義や訓釈だけは暗記できたとしても、そのなかの一、二字を落としてしまえば、あたかも物が角の部分を欠いてしまっているように、自分の内側は決して充塞することはない。やがて自分で文章を作る段になっても、やはり欠けたところがあって、文脈を成さないだろう。以前に夷狄や武官の書いた文章を見たが、いつも文脈を成していないのは、まさにこういうことだ。彼らは心中ではこのように述べなければならぬと分かっているのだが、字義についての知識に欠けているので、表現が不適切になるのだ。これこそが（告

子の)「言に得ざるも、心に求むること勿れ」という弊害だ。彼らは心に蔽われているところがあるゆえに、こうなるのだ。司馬遷『史記』の書きぶりにも不適切なところがある。賈誼もそうだ。例えば、「治安策」の太子を教育することを説いた箇所で「太子少しく長じて妃色を知れば、則ち学に入る」と言っているが、この下文に続けてこの意味を説明すべきであるのに、急に方向を変え、学について「学とは、学ぶ所の官なり」と言っている。また、「帝、東学に入り、親を上び仁を貴ぶ」の一段を述べ終わって、はじめて太子のことに言及し「太子既に冠して成人するに及び、保傅の蔽を免る」云々と述べているが、まったく文脈を成していない上に、区切りもない。彼はただ文才に乗じて、でたらめに書いただけである。このような文章を手本としてはいけない。董仲舒の文章は端正だが、ただやはり窮屈だ。董仲舒・匡衡・劉向といった諸人の文章はみんな、善良だが弱々しく、気焰に欠けている。司馬遷・賈誼の文章は雄壯で愛すべきであるが、ただ放恣で、言葉遣いに時折穩当でないところが見られ、区切りもはっきりしない。匡衡の文章はむしろ緻密だ。彼は極めて詳細に經書を読み、内面について力を注ぐことのできる人物であったが、為人が人物的ひとなかりに問題があり、気骨に欠けた。董仲舒の読書は匡衡ほど細やかではなく、いい加減なところが非常に多い。しかし、その純正開豁な為人は、匡衡の及ぶところではない。」

朱子「荀子が「誦数以て之を貫き、思索以て之を通す」と言っている。「誦数」とは、今の人が読書する際に回数記録するのと同じことだ。古人もこのように読書したのだ。ただ、荀卿の書いたあの文章には不適切なところも多い。」

[注]

「記録者 沈憫」

(1) 硬寨 守りの堅い要塞。転じて、堅固な意志や態度を言う。卷七・10条(一二六頁)「如二十歳覺悟、便從二十歳立定脚力做出。三十歳覺悟、便從二十歳立定脚力做出。縱待八九十歳覺悟、也當據見定筭住硬寨做去」。

(2) 被自家讀得 同様の用例として次のようなものがある。卷五九・71条(一三九四頁)「積來積去、被自家積得多了、人家便從容」、卷一一七・52条(二八三一頁)「凡事雖未理會得詳密、亦有箇大要處。縱詳密處未曉得、而大要處已被自家見了」。「被」の字の文法的用法は未詳だが、用例から判断して、「自分ですつかり、自分のものにして」といったニュアンスか。次のような「被他」も同様か。卷九九・4条(二五三二頁)「因舉曾子任重道遠一段、曰、子思曾子直恁地、方被他打得透」、卷四一・22条(〇四八頁)「顔子天資高、精粗本末一時見得透了、便知得道合恁地下學上達去。只是被他一時見透、所以恁做將去」。

(3) 不得於言、勿求於心 『孟子』公孫丑上「曰、敢問夫子之不動心、與告子之不動心、可得聞與。告子曰、不得於言、勿求於心。不得於心、勿求於氣。不得於心、勿求於氣可。不得於言、勿求於心不可」。

(4) 賈誼 賈誼(前二〇〇〜前一六八)前漢の文臣。文帝に仕えた。『史記』卷八四・賈誼伝。『漢書』卷四八・賈誼伝。卷一三七・18条(三二五七頁)「賈誼之學雜。他本是戰國縱橫之學、只是較近道理、不至如儀秦蔡范之甚爾。他於這邊道理見得分數稍多、所以說得較好。然終是有縱橫之習、緣他根脚只是從戰國中來故也」。

(5) 治安策 賈誼が漢の文帝に奉った、時局糾正の方策を述べた上奏文。『漢書』卷四八・賈誼伝、お

よび賈誼『新書』に収められている。

(6) 太子少長知妃色、則入于學 『漢書』卷四八「及太子少長、知妃色、則入于學。學者、所學之官也。學禮曰、帝入東學、上親而貴仁、則親疏有序而恩相及矣。帝入南學、上齒而貴信、則長幼有差而民不誣矣。帝入西學、上賢而貴德、則聖智在位而功不遺矣。帝入北學、上貴而尊爵、則貴賤有等而下不隲矣。帝入太學、承師問道、退習而考於太傅、太傅罰其不則而匡其不及、則德智長而治道得矣。此五學者、成於上、則百姓黎民化輯於下矣。及太子既冠成人、免於保傅之嚴、則有記過之史、徹膳之宰、進善之旌、誹謗之木、敢諫之鼓」。また、『新書』卷五「保傅」。

(7) 這下面承接し更無段落 同様の話題として卷一三五・36条(三二二五頁)に「賈誼説教太子、方説那承師問道等事、却忽然説帝入太學之類。後面又説太子、文勢都不相干涉。不知怎地、賈誼文章大抵恁地無頭腦」とある。

(8) 董仲舒 董仲舒(前一七六?〜前一〇四?)前漢の儒者。武帝に仕える。『史記』卷一二二。『漢書』卷五六。卷一三七・18条(三二五七頁)「漢儒惟董仲舒純粹、其學甚正、非諸人比。只是困苦無精彩、極好處也只有正誼、明道兩句」。

(9) 匡衡 前漢の學者・政治家。家が貧しく、隣舎の壁に穴を穿つて光を引いて読書した故事(『蒙求』上「匡衡鑿壁」など)で有名。『詩経』に詳しく、上奏文は経義にことよせて時事を論じたものが多い。建昭三(前三六)年、丞相となり、楽安侯に封ぜられる。成帝の時、封国の田租を多く接收したことを弾劾され、職を免じて庶人とされる。『史記』卷九六。『漢書』卷八一「匡張孔馬伝」。

(10) 劉向 劉向(前七七〜前六)前漢の学者。宮中の蔵書の校訂や目録の作成を行い、『漢書』芸文志の基礎を作る。

(11) 荀子云、誦數以貫之、思索以通之 『荀子』勸学篇。

【一六・五五】

郭徳元告行、先生曰「人若於日間閑言語省得一兩句、閑人客省見得一兩人、也濟事。若渾身都在鬧場中、如何讀得書。人若逐日無事、有見成飯喫、用半日靜坐、半日讀書、如此一二年、何患不進。」〔憫。〕

〔校注〕

(校1) 本条は楠本本「訓門人」には収められていない。

(校2) 朝鮮整版は「閑」を「聞」に作る。

〔訳〕

郭徳元(友仁)が暇乞いをする、先生がおっしゃった。

朱子「人がもし日中、無駄な話を一、二句省き、無駄な客人を一、二人減らせば、それで十分だ。喧騒の場にどっぷり浸かっているようでは、どうして書物を読むことができようか。人がもし毎日しなければならぬこともなく、働かなくても食べてゆけるのならば、半日を静坐に費やし、もう半日は読書をすればよい。

そういう生活を一、二年続けることができれば、進歩しないはずはない。」

〔記録者 沈憫〕

〔注〕

(1) 鬧場 芝居などの開幕を知らせる銅鑼太鼓。

(2) 見成飯 できあいの飯。勞せずして手に入る利益の比喩表現。

(52) 55条担当 原信太郎)

※ 本稿は、平成十七(二十一)年度文部科学省科学研究費補助金・特定領域研究「東アジアの海域交流と日本伝統文化の形成―寧波を焦点とする学際的創生」による「中国思想文献の近世日本社会への伝来とその流通―新儒教と医学思想の文献を中心として」(課題番号一七〇八三〇三四)の研究成果の一部である。